

ナルノミナラス右委員ハ結局ニ於テ露國ニ讓歩スルニ至ルヘキニ付危險ナリト認メラルニ依リ伍廷芳ニ對シ、清國カ時局ニ對シ傍観シ得ナルカ故ニ愈々行動ヲトランツル意ナラハ第一ニ一九〇二年ノ滿洲協約ノ條項ニ依リ撤兵ヲ露國ニ催告シ、若シ露國カ之ヲ拒絶シ又ハ撤退ヲナサナルニ於テハ問題ヲ海牙仲裁裁判所ニ提起センコトヲ露國ニ提議スヘク、尙之ヲモ排斥スルニ於テハ之ヲ列國ニ訴へ其援助ヲ請フヘシ、然レトモ之カ實行ニ當リテハ慎重處理ヲ要スヘク本使ハ日本政府カ清國ヨリ懇望アラハ之ニ必要ナル各種ノ措置振ニ付清國ニ援助ヲ與フヘシト信ストノ趣旨ヲ一己ノ意見トシテ内密ニ語ルヘキ旨訓令シタリ。而シテ内田公使ハ伍廷芳ニ右訓令ノ次第ヲ傳ヘ伍ノ時局問題討議ノ爲ノ列國會議開催案ニモ反対シタリ。

他方露國側ニ於テハ露清銀行支配人「ボズドネフ」ハ清國譯官ヲシテ清國カ露國要求ノ二、三項ヲ承諾セハ露國ハ撤兵スルナラント云ハシメ、又十一月二十九日在清佛國公使ハ外務部ニ對シ右ト同様ノコトヲ述ヘ、清國ニシテ要求ヲ毫モ容認セサルニ於テハ露國ハ非常ニ憤怒シ撤兵ヲ行フコトナカルヘキニ付清國ハ他ノ外國ニ相談スルノ要ナク直接露國ト協定ヲ遂クヘキ旨勸告シタルカ、外務部ハ撤兵ノ實行セラレサル間ハ何等ノ商議ヲナス能ハサル旨答ヘタル趣ナリ。

斯ク清廷ハ當初ヨリ露國要求ノ一部ヲ承諾シテ時局ヲ結了セントノ意向ヲ有シタルモ、慶親王、那桐及外務部ハ帝國政府ノ助言ニ信頼シテ從來ノ態度ヲ固持シ露國ノ要求ニ應セサリシ間ニ日露開戦トナリ。

第九章 滿韓ニ關スル日露間交渉

韓國問題ハ明治三十一年四月西外務大臣ト露國公使「ローゼン」男トノ間ニ日露議定書締結ニ依リ一時落着セル處、北清事變後明治三十四年一月在京露國公使「イズヴァルスキイ」ハ帝國政府ニ對シ、列國共同保證ノ下ニ韓國ヲ中立國トスル案ニ關シ同案實行ノ條件ヲ内密且ツ友誼的ニ協議シ度旨ヲ申出テタリ。

之ニ對シ帝國政府ハ韓國問題ヲ之ニ牽連セシメサレハ満足ニ解決シ難キニ付滿洲ノ撤兵履行セラレ中立保障ヲ滿洲ニモ及ホスカ又ハ勢力範圍ヲ確定スル意アルニアラサレハ右議定書ノ約束ヲ以テ満足スルノ外ナシトノ趣旨ヲ以テ之ヲ拒絶シタリ。

然ルニ我方トシテハ韓國ニ於テ全然自由ノ行動ヲ執リ得ル様韓國問題ヲ解決セントスル意圖ニハ依然變化ナク、伊藤侯ノ如キハ之カ爲ニハ滿洲ニ於テ露國ニ幾分ノ自由行動ヲ認メテ露國ト協和スルヲ得策トシ、明治三十四年十一月歐米漫遊ノ途次露都ヲ訪問シ、「ラムスドルフ」伯及「ウイット」ト私的會議ヲ行ヒ協商ノ基礎タルヘキ双方私案ヲ提出シ、侯ハ政府ニ對シ日英同盟成立前露國トノ交渉ニ入ルヘキヲ勧說シタリ。帝國政府ニ於テハ右伊藤侯ノ勧告ヲ容レス日英同盟ノ交渉ヲ進行セシムルヲ適當ト認メ翌明治三十五年一月三十日英同盟ヲ締結シタルモ、韓國問題ヲ我方ノ満足ニ解決センカ爲露國ト協商スルノ方針ハ棄テタルニアラス、同年春露都ニ赴任セル栗野公使ニ對シ本問題ヲ熱心ニ攻究シ將來ノ正式談判ノ基礎タリ得ヘキ協調ヲ遂タル様訓令スル所アリタリ。他方露國ニ於テモ外務大臣「ラムスドルフ」伯、大藏大臣「ウヰテ」等ハ伊藤訪露當時ト同様ニ我方トノ協調ヲ欲シ双方ノ意見

接近ヲ見タリ。

然ル處明治三十六年四月第二次滿洲撤兵期ニ至リ露國ニ於テハ其極東政策ニ對スル武斷派ノ勢力勝ヲ占メ、滿洲ニ於テ撤兵ヲ中止セルノミナラス却テ永久占領ノ企圖ヲ實現スルノ施策ヲナシ、朝鮮ニ於テモ侵略的行動ヲ敢テスルニ至リ形勢重大化セルヲ以テ、六月帝國政府ハ帝國ノ自衛線ト韓國ニ對スル勢力ノ確保ノ爲露國ト直接交渉ヲ開始シ友誼的ニ滿韓ニ於ケル兩國ノ利益ヲ調理スルノ協約ヲ締結スルニ決シ、形勢ヲ見定メタル上七月二十八日栗野公使ニ電訓シテ公式ニ露國政府ノ意見ヲ問ハシメタル處、露國政府之ニ同意ヲ表シタルニ依リ八月十二日我方ヨリ協定ノ基礎案ヲ提出シタリ。

之ニ對シ露國政府ハ其後ノ國內事情ニ變化アリタルモノ如ク交渉地ヲ東京ニ變更セントヲ申出テ我方之ニ應シタルモ、我提案ニ對スル回答ハ遷延シ漸ク十月三日ニ至リ之ヲ提出シ來レリ。露國對案ハ協約ノ範圍ヲ韓國ニ限リ、同國ニ於ケル我自由行動權ヲ極メテ制限的ニ認メ且ツ平壤、元山等ヲ含ム韓國ノ三分ノ一二相當スル北韓ヲ中立地帶トナシ、滿洲ニ關シテハ絶對的ニ日本ノ利益範圍外トスル外何等ノ約定ヲモ爲ササルモノナリ。

依テ小村外務大臣ハ「ローゼン」公使ト四回ニ涉リ會談ノ上我提案ヲ修正シタルモ、露國ハ回答ヲ遅延シ、滿洲ニ關係スル條項ヲ全然削除シ又「ローゼン」ト協議セル事項ヲモ覆ヘシ依然トシテ韓國ニ於ケル我自由行動ヲ減殺セルヲ以テ、帝國政府ハ國內ノ輿論ニモ顧ミ已ヲ得サル場合断乎タル行動ニ出ツル準備ヲナスト共ニ猶出來得ル限り和協ノ精神ヲ以テ本問題ヲ解決セント努メ、十二月二十一日露國政府ノ再考ヲ求メタリ。

露國政府ハ翌三十七年一月六日ニ至リ對案ヲ提出セルカ、右對案ニ於テハ初メテ滿洲ニ於ケル各國ノ條

三五二

約上ノ權利ヲ尊重スルコトヲ承認セルノミニテ滿洲ノ領土保全ニ關シテハ毫モ言及スル所ナク其原案ヲ固執セルヲ以テ、同月十三日帝國政府ハ更ニ之以上退讓ノ餘地ナキ最終の修正案ヲ提出シタリ。然ルニ露國政府ハ容易ニ之カ回答ラナス又回答期限ノ指定ニ關スル我方要望ヲモ聽カスシテ、外國ニ於テ露國ハ平和的ナリトノ宣傳ヲ行ヒ、他方滿洲ニ増兵シ、又清國ニ對シ策動ヲ爲ス等誠意ノ認ムヘキモノナカリシヲ以テ、二月四日遂ニ帝國政府ハ自由行動ヲトルコトニ決シ、次テ露國ト外交關係斷絶ヲ決行スルコトシ夫々之ヲ露國政府ニ通告シ、二月十日栗野公使ハ露都ヲ引揚ケ同日宣戰ノ詔勅下リ、日露兩國ハ戰爭狀態ニ入レリ。

本章ニ於テ右滿韓ニ關スル日露間交渉ノ經過ヲ設述スヘシ。

第一節 韓國ノ永久中立ニ關スル露國ノ提議

明治三十三年夏在本邦韓國公使趙秉式ハ青木外務大臣ニ對シ、韓國ヲ列國保障ノ下ニ中立國トナスノ目的ヲ以テ帝國政府ト交渉ヲ開キ度旨ヲ申出テタルモ、同大臣ハ之ニ信ヲ置カサリキ。其後同年十二月二十日在京露國公使「イズヴォルスキイ」ハ加藤外務大臣ト韓國問題及日露漁業條約締結問題ニ關シ會談ノ際、前駐日韓國公使ノ韓國ヲ中立國トナス話ハ如何ニ思惟セラルルヤト問ヒタルニ依リ、大臣ハ鮮人カ中立ナルモノ如何ヲ知リテ此議ヲ爲セシヤ否ヤモ分ラス自分モ未タ此問題ヲ研究シ居ラス、併シ露國又ハ貴公使ニ案アルナラハ之ヲ承知シ慎重ニ審議スルノ外ナシト述ヘ置キタルカ、右ハ先方カ我意ヲ探ラントセルニ付先方ヨリ案ヲ出サシムルトモ我方ヨリ之ヲ出スノ必要ヲ認メナル意味ニテ應對シタルモノナリ。然ルニ明治三十四年一月七日露國公使ハ本國政府ノ訓令トシテ、

三五三

露國政府ハ列國共同保障ノ下ニ韓國ヲ中立國トスルノ案ヲ提議スルヲ得策ト思考ス、然レトモ本件ニノ實行セラルヘキ條件ヲ内密ニ且ツ友誼的ニ協議シ度旨ヲ申出テタリ。

右提議ニ關シ在清小村公使ハ其意見トシテ、本案ハ滿洲ニ於ケル露國ノ行動ヲ多少ナリトモ有效ニ抑

制シ得ヘキ日本ノ韓國ニ於ケル現位置ヲ失ハシメ又日本ノ威信ニ重大ナル影響ヲ及ホスノ障害アリ、

滿洲問題ト牽連セシムルニアラナレハ韓國問題ノ解決ハ満足ノモノニアラナルカ故ニ滿洲ヲモ中立地

ドセサル限リ本提議ヲ容レ得サルカ、若シ之カ出來サレハ日本ハ韓國ニ、他方露國ハ滿洲ニ各勢力範

圍ヲ分割スルヨリ外ニ方法ナカルヘキ旨ヲ外務大臣ニ電票スル所アリタリ。

依テ一月十七日加藤外務大臣ハ在露珍田公使ニ訓令シテ露國政府ニ對シ本件提議ノ回答トシテ、一八

九八年四月二十五日ノ議定書ヲ以テ露國ト約定セル所以ノモノハ露國カ遼東半島ノ一部ニ對シ取得セ

ル用益權ハ一時的ノモノニシテ其性質ニモ制限アリ且ツ其地域カ韓國ニ接近セサル部分ニ限局セラレ

居ルヲ以テ露國ノ位格ハ遼東半島ヨリ日本ノ撤退スヘキ勸告ノ第二項（即韓國ノ獨立ヲ水泡ニ歸セシ

ムルモノナリトノ項）ト抵觸セサルヲ以テナリ、然ルニ滿洲ニ於ケル露國現下ノ態度ハ全然是ト別異

ノ觀象ヲ顯シ自然他國ニ不安ヲ起サシムルモノナレトモ幾ニ無之ハ露國カ滿洲ヨリ撤退スルコトヲ確

然聲明セルカ為ナリ、右一八九八年ノ議定書ハ今猶有效ニシテ日本側ヨリ見レハ其運行宜キヲ失ハス

先ツ現下ノ事宜ニ適應スルモノナレバ、中立ノ保障ヨリ繼發シ得ヘキ諸種ノ推測及論斷ヲ防遏スルノ目

的ヲ以テ從前ノ狀態ニ復歸シ、外部ノ事情ニ妨碍セラルルコトナク自由ニ交渉ヲ遂行シ得ルニ至ル迄本

件ノ商議ヲ延期スルヲ得策ナリト信スル旨ヲ通告セシメ、同日在京露國公使ニモ右訓電ノ意ヲ口述シ

タリ。

右帝國政府ノ回答ニ對シ露國公使ハ、本件提議ハ友誼ノ精神ヲ以テ爲シタルニ日本政府カ滿洲問題ヲ之ニ關聯セシメタリト苦情ヲ述ヘタルニ依リ、加藤大臣ハ此ニ問題カ互ニ關聯スルモノナルコトヲ説明シタル後私話トシテ、中立保障ノ範圍ヲ滿洲ニ及ホスカ又ハ勢力範囲設定ノ意アルニ於テハ本問題解決ノ一方法タルヘシト述ヘタルカ、公使ハ顧ミテ他ヲ言ヒ答フル所ナカリキ。

在露珍田公使ハ一月二十三日口上書ヲ露國外務大臣ニ手交シタルニ同大臣ハ、露國ハ韓國ニ關スル現行ノ日露協商ヲ以テ充分滿足スルモノニシテ該問題ニ關シ他國ノ干涉ヲ回避スルコトハ又其擇フ所ナリ、日本ト友好的ニ意見ノ交換ヲナシントノ露國ノ提案ハ小村前公使カ語リタル所ニ依テ察スルニ日本カ韓國ノ現状ニ不滿ヲ抱クカ如キモノナルヲ以テ其意衷ニ副ハントスル希望ヨリ發シタルモノナリ、中立ナル觀念ノ發意ハ露國自身ノ希望トシテ之ヲ爲シタルモノニアラスシテ却テ露國カ日本ニ與ヘントスル讓與ノ一トシテ爲シタルモノナリ、若シ日本ニシテ韓國問題ニ關シ意見ノ友好的交換ヲ爲サン

ト欲スルニ於テハ露國ハ直ニ之ニ應スヘシト言ヘリ。

韓國中立案ニ關スル露國政府ノ提議ハ前述ノ如ク我方ノ拒絕ニ依リ一應落着セルモ、在本邦「イズヴォルスキイ」公使ハ右提議ニ當リテモ本國外務大臣「ラムスドルフ」伯ノ云フ所ト少シク其態度ヲ異ニセルモノアリタル處、明治三十五年九月ニ至リ在韓「バゾロフ」公使ハ歸國ノ途次東京ニ立寄リタルカ、同人ハ「イズヴォルスキイ」ト凝議ノ結果在米「カシニイ」公使ト共ニ日露米三國ノ共同擔保ノ下ニ韓國ヲ永久中立國トスルノ議ヲ本國政府ニ獻策スルニ決シ米國經由巴里ニ到リ同地滞在ノ「カシニイ」伯ノ贊同ヲ促カス等ナリトノ風説起リタリ。然ルニ韓廷ノ一部ニハ今猶本問題ヲ夢想スルモノアリ且ツ露

国ニハ韓國中立論者モ少ナカラス、同國新聞亦之ヲ論議シ居リ又前在韓代理公使「ウエベル」カ韓帝卽位

四十年慶賀式參列ノ爲來韓スル等右風説ノ確實性アリシヲ以テ、我方ニ於テハ極秘裡ニ其眞相ノ探究ニ努メタルモ米國政府ニハ斯ル案ヲ容ルルノ意ナク、同案モ遂ニ實現ヲ見ルニ至ラナリキ。

第二節 伊藤侯ノ日露協和案

一、伊藤侯ト「ラムスドルフ」伯トノ交渉

明治三十四年四月其内閣辭職後伊藤侯ハ閑地ニ在テ外遊ヲ志シ居リタル際米國「エール」大學ヨリ學位ヲ贈ラレタルニ依リ、之ニ對シ挨拶ヲ爲シ併セテ豫テ抱懷セル韓國問題ノ解決上同侯一己ノ責任ニ於テ個人ノ資格ヲ以テ露國當路ノ有力者ト自由ニ腹藏ナク意見ヲ交換シ或ル満足ナル基礎ヲ發見セント試ミルコトヲ桂總理大臣トモ協調ノ上、露都ヲ訪問スル豫定ヲ以テ米國ヨリ十一月四日巴里ニ到着セリ。當時日英同盟ノ議大ニ進捗シ居リ侯ハ同地ニ來レル在英林公使ヨリ交渉ノ模様ニ付報告ヲ受ケタルモ豫約ノ通リ兎ニ角一應露都ニ赴クコトトシ、同月十四日桂總理大臣ニ向ヒ右露都行ノコトヲ告ケ何分ノ通知ヲナス迄ハ英國政府ニ對スル回答ヲ待ツ様電報スル所アリタリ。之ニ對シ桂總理大臣ハ日英同盟問題ハ非常ニ進捗シ居リ回答ヲ遷延スル能ハサル状勢ニ在レハ速ニ露都ヲ訪問セラレント及右露都訪問ハ單ニ漫遊ニ止メ日英同盟ノ商議ニ伴ルカ如キ交渉ハ此際避ケラレント懇請シタリ。

十一月二十六日伊藤侯ハ露都ニ着シ帝室及政府ノ懇篤ナル獻侍ヲ受ケ二十八日皇帝ニモ謁見シ、次テ

十二月一日ニハ「ラムスドルフ」伯ト、翌三日ニハ大藏大臣「ウイッテ」ト東洋問題ニ付意見ヲ交換シタル後四日約ニ依リ「ラムスドルフ」伯ニ左ノ協定案ヲ手交シタリ。

伊藤侯案

第一條 韓國獨立ヲ相互ニ保障スルコト

第二條 韓國領土何レノ部分タリトモ兩國相互ニ對シテ兵略的目的ノ爲使用セザルヘキコトヲ相互

二 保障スルコト

第三條 朝鮮海峽ノ自由航行ヲ危クスル一切ノ軍事的準備ヲ韓國沿岸ニ於テ爲ササルヘカラサルコトヲ相互ニ保障スルコト

第四條 露國ハ政治上工業上及商業上ノ關係ニ於テ韓國ニ於テ日本ノ自由行動ヲ認メ並ニ韓國カ其善良ナル政府ノ義務ヲ行フニ當リ日本カ助言ト助力トニ依リ同國ヲ扶助スルノ專權ヲ有スルコトヲ認ムルコト、右ノ中ニハ叛亂竝ニ日韓兩國ノ平和的關係ヲ不安ナラシムヘキ類似ノ事端ヲ鎮靜スル爲必要ノ範圍内ニ於テ軍事上ノ助力ヲ與フルコトヲモノトス

第五條 本協約ハ總テ從前ノ協定ニ代ハルモノトス
十二月四日伊藤侯バ露都ヲ出發シタルカ、八日伯林ヨリ桂總理大臣ニ對シ露國側カ日本ト一ノ協調ヲナスコトヲ衷心希望シ居ルヲ認メタルコト及其提出セル協定基礎案ノ要旨ヲ報シ、韓國ニ於テ利益ヲ有スル唯一ノ國タル露國ト一ノ協調ヲナスハ今日ヲ以テ最良ノ機會トナシ日英同盟締結後ニナラハ右ハ不能トナルヲ以テ此際親密ナル協調ヲ試ミラレンコトヲ強ク勸告スル旨ヲ電報シタリ。
右伊藤侯ノ交付セル協定基礎案ニ對シ「ラムスドルフ」伯ハ同月十四日附ヲ以テ皇帝ノ命ニ依リ當局諸大臣ト協議ヲ遂ケタル結果ナリトテ其對案ヲ送リ來レリ。

右露國ノ修正案ハ

第三條ハ變更セス、但シ第二條中「兩國相互ニ對シテ」ノ語ヲ削除ス、若シ第二條及第三條ノ

冒頭ヲ原案ノ如ク「日本ハ約ス」ノ代リニ「相互ニ約ス」トセハ異議ナシ

第四條ハ「政治上」及「助力」ヲ削ル、即チ「露國ハ工業上及商業上ノ關係ニ於テ韓國ニ於ケル日本ノ行動ノ自由ヲ認メ並ニ日本ニ於テ露國

ト協議ノ上凡テ善良ナル政治ニ伴フ義務ノ完行上韓國ヲ補助スルニ足ルヘキ助言ノ方法ヲ用ヒ單獨ニテ韓國ヲ扶助スルノ優越的權利ヲ有スルコトヲ認ムルコト、右ノ中ニハ叛亂又ハ日韓兩國間ノ平和的關係ヲ傷害スルノ恐アル一切ノ騒擾ヲ鎮壓スル爲緊急缺クヘカラナルノ範圍ニ於テ軍事上ノ助言ヲ與フルコトヲモ包含ス」

(三) 左ノ二ヶ條ヲ加フ

第五條 前條ニ掲ケタル場合ニ於テハ日本ハ嚴ニ必要ナル軍隊ノ外一切韓國ニ派遣セナルヘク又其軍隊ハ任務ヲ果シ次第直ニ之ヲ召還スヘキコトヲ約ス

同時ニ日本ノ軍隊ハ露國境界ニ沿接シテ豫メ明ニ劃定セラルヘキ地域ノ限界ヲ決シテ超出セサルヘキコトニ合意ス

第六條 日本モ亦露國々境ニ界接スル清帝國ノ領土ニ於ケル露國ノ優越權ヲ認メ同地方ニ於ケル露國ノ行動ノ自由ハ如何ナル方法ヲ以テシテモ之ヲ阻碍セナルヘキコトヲ約ス

右ニ對シ十二月二十三日伊藤侯ハ「プラッセル」ヨリ返事ヲ送リ、露國側修正案ハ兩國間ニ實際的且ツ永續的協調ノ容易ニ遂ケラルヘキ信セシムモノニ非ス、修正案第六條ハ餘リニ漠然トシテ清國ノ同地方ニ於テ露國ノ採ルヘキ措置ニ關スル露國政府ノ眞意及希望並ニ其勢力ヲ揮ハントスル範圍カ不

明瞭ナルノミナラス右ハ會見ノ際既ニ自分ノ意見ヲ述へ置キタルモノナリ、第四條ハ帝國ノ地位ヲシテ兩國ノ豫議ヲ經タル意思ノ執行者ノ如キニ減セシムルモノニシテ豫議若クハ協働ノ主義カ極東ニ於ケル事局ノ鞏固ナル均衡上危險ナルコトハ會見ノ際既ニ詳述反對シ置キタル所ナリ、更ニ第五條ノ如ク韓國ニ於ケル我方ノ自由行動ヲ制限的ナラシムルモノアリテ細目ノ研究ヲ要スルモ、本案一覽ノ感觸ニ依レハ差當リ本案ヲ日本政府ニ徴通スルノ便否ニ付重大ナル疑問ヲ有ストノ趣旨ヲ述へ置キタリ。

二、伊藤侯案ニ對スル政府ノ意見

十二月十七日伊藤侯ハ伯林ヨリ桂總理大臣ニ電報シ右露國修正案ニ付報告シタル上、其第四條ニ豫議ノ主義ヲ追加スルハ同意シ難ク、第五條ノ未文ハ相互のトシ但書ヲ加フルヲ要スヘク又第六條ハ意義ヲ明確ナラシムル要アルモ右ハ日本政府ニシテ交渉ヲ爲サハ此等ノ細目ハ妥協點ヲ見出シ得ヘシト確信スルニ依リ、自分ハ第四條ニ對スル露國側ノ修正及第六條ノ組立ハ他ノ數點ト共ニ私見ヲ吐露スル前考慮ヲ加フルニ多少ノ時日ヲ要スヘシトノ旨ヲ先方ニ返答セント思考ス、然レトモ是迄進行シタル此交渉ヲ停止セサ再ヒ近キ將來其機會ナカルヘキニ依リ此電報ヲ元老ニ示サレ度旨ヲ述ヘタリ。之ニ對シ同月二十日桂首相ハ伊藤侯ニ對シ、滿洲問題ニ付テハ自分ハ伊藤侯執政時代ノ政策ヲ踏襲シ現下ノ滿洲談判ニ關聯シテ清國政府ニ對シ第三國ノ條約上ノ権利又ハ清國ノ主權ヲ侵害スヘキ何等ノ協約ヲ結ハサル様助言ヲ與ヘ、英米モ之ニ倣ヒ且ツ政府ハ再三留保ヲ付セシテ清國ノ領土保全ト同國ニ於ケル企業權ノ均等ハ日本政府ニ於テノ一ノ主義トスル所ナル旨ヲ聲明シタル次第アリ、又同盟問題ハ別トスルモ此際韓國ニ於ケル讓與ノ報酬トシテ滿洲ニ關シ帝國從來ノ態度ト相容レサル協定ヲ露國トナスコトハ列國ニ對シ威信ヲ失フヘキヲ以テ露國案第六條ハ到底容ルルヘカラス、該條ハ一八九八年ノ西

男及一九〇〇年ノ小村ノ提議ト一致スル所ナリトイエ爾來時局一變セリ、而モ我提議ハ相互主義ニ基クモノナルカ此露國案ハ相互主義ヲ開却シタルモノナルカ故ニ此點ニ關シ何分ノ御意見アル迄ハ貴電ノ披露ヲモ見合スヘキ趣旨ヲ申送レリ。

依テ同月二十三日伊藤侯ハ、韓國ニ關スル自分ノ目的、同國ノ現状ヲ一層我利益ニ變更シ同國ノ政治上ノ干涉ニ於テ我方ニ獨占的自由行動ヲ獲得スルニ在リ、此目的ニ付露國ヲシテ承認スル覺悟ヲ要ス、右自由行動トハ露國カ占領前事實上ニ於ケル露國ノ自由行動ヲ幾分我方ニ於テ承認スル覺悟ヲ要ス、右自由行動トハ露國カ占領前事實上占有シタルモノト占領後我方ノ欲スルト否トニ不拘占有スヘキモノ例ヘハ鐵道保護ノ如キモノノミ露國ニ讓與セントスルモノナリ、而シテ單ニ相互主義ヲ基礎トスル協調ヨリハ日本ニ一層有利ナル事態ヲ設定スヘク都合惡キ場合ニ於テ相互主義ニ出ツル覺悟ナリキト證明シ、交渉開始ニ際シ露國修正案ハ讓歩セシメ得ヘシト信ス而シテ韓國ニ於ケル現狀ノ變更ハ其維持ノ爲英國トノ協調モ日露間ノ協調ヲ得ナレハ我方ニ裨益スル所ナカルヘキヲ以テ將來此目的ヲ現實ニスルコト肝要ナルヘシト回答セリ。

右ニ付十二月二十九日桂總理大臣ハ伊藤侯ニ電報シ、露國ニ與ヘ得ヘキ讓與ニ付テハ侯ト同意見ナリ、若シ露國ヲシテ侯ノ信スル如ク讓歩セシメ得テ豫備的協議ノ成立スルニ於テハ公然談判ノ手續ヲ取ルヘシ、然シ我要求ノ相互主義ハ滿洲ニ於ケル露國ノ軍事的行動ヲ叛亂乃至騷擾ノ鎮壓及鐵道ノ保護ニ制限シ露國ヲシテ滿洲ヨリ撤兵シ同地方ノ一部タリトモ兵略上ノ目的ニ使用スルヲ得ナラシムルコトニアルヘシ、伊藤侯案ノ第一條ハ「相互ニ承認ス」トイフニ止メタランニハ保護國ノ權利ヲ行使セシメス韓國ニ於テ軍事上及政治上斷然露國ヲ除去スル帝國ノ政策ニ便ナルヘシ、露國案第二條及第三條ハ日

第二節 日英同盟ト露佛宣言

第一項 日英同盟ニ對スル露國ノ態度

明治三十五年二月十二日英同盟發表ノ當日栗野公使ハ露國外務大臣「ラムスドルフ」伯ニ同盟ノ内容ヲ通知スルト共ニ其性質ノ平和的ナルヲ説明スルヤ、同大臣ハ右協約ノ締結ヲ聞キ頗ル驚愕ノ模様アリシカ、該協約ノ前文ニ敍列セラレタル主義ハ露國ノ希望ト全然投合スルモノナレハ露國ハ何時タリトモ好シテ協定ヲ爲スヘク、露國ハ清韓兩國ノ獨立保全ヲ侵害シ又ハ干涉スルノ意ヲ有セサルハ滿洲占領ヲ相當ノ時機ニ於テ撤退スルノ決心ニ徵シ明カナリ、然ルニ該協約ニ於テ戰爭ニ關スル條項ヲ見ルハ極メテ遺憾ニ堪ヘサル所ナリ蓋シ其目的カ我露國ヲ意味スルコト明瞭ナレハナリ、抑々露國ノ

政策ハ日本ト満足ナル協調ヲ遂クルニ在リテ極東ニ於ケル戰爭ノ如キハ夢想タニ浮ハサル所ナリト云ヒ、又日露一度親密ナル協調ニ至ランカ或國ハ之ヲ離間セント欲ストノ趣旨ヲ述ヘタリ。

又二月十五日露國大藏大臣「ウイヅ」ハ栗野公使ト會談ノ際日英協約ノ主義ハ露國ノ政策ト一致スルモノニシテ露國ハ清韓兩國ニ於ケル現狀及其獨立保全ヲ害スル意ナキ旨ヲ述ベ、日露ノ協諒ニ付テハ伊藤侯ト胸襟ヲ開キテ意見ヲ交換シタル如ク露國ハ日本ト友好ニシテ健固ナル協諒ヲ遂クルノ意アリ而モ露國人一般モ日本ニ友好的意嚮ヲ有スル旨ヲ語レリ。

第二項 露 佛 宣 言

日英同盟締結後明治三十五年三月露佛兩國ハ之ニ對處スル爲極東ニ於ケル兩國共通ノ利益ヲ保護スルノ目的ヲ以テ新條約締結ノ商議中ナル情報アリタル處、三月十九日露國外務大臣ハ在露栗野公使ニ對シ清國及韓國ノ獨立ニ關スル露佛共同宣言ニ付通告スルト共ニ、同日東京ニ於テ佛國代理公使及露國公使ヨリ小村外務大臣ニ左記宣言書ヲ提出シ來レリ。

『露佛兩國政府ハ曩ニ極東ニ於ケル現狀及一般ノ平和ヲ確保シ且ツ清韓兩國ノ保全ヲ維持シ該二國ヲ依然各國民ノ工商業ニ開放スルノ目的ヲ以テ締結セラレタル一九〇二年一月三十日ノ日英協約ノ通牒ヲ受ケ露佛兩國カ從來屢次其政策ノ基礎トシテ宣明シ且ツ今日猶然ル所ノ主要ノ諸原則カ該協約ノ確認スル所タルヲ見ルニ於テ充分満足シタリ

露佛兩國政府ハ前頭ノ諸原則ノ尊重ヲ以テ同時ニ極東ニ於ケル兩國特別ノ利益ノ保障ナリト認ム然レトモ兩國政府ニ於テヨ第三國ノ侵略的行動若クハ清國ニ於テ騷擾新生ノ爲該國ノ保全及自由發達ニ不安ヲ來シ隨テ兩國特別ノ利益ヲ侵迫スヘキ場合ヲ考量セザルヲ得ナルヲ以テ結局該利益ノ擁護

ヲ確保スルノ手段ニ付備フルコトヲ茲ニ自ラ保留スルモノナリ』

小村大臣ハ佛國代理公使ニ對シ該宣言ハ日英協約ニ掲ケタル諸原則ヲ確認スルモノナルヲ以テ帝國政府ニ於テハ之ニ満足ヲ表スヘシト答ヘ、三月二十五日栗野公使及安達代理公使ヲシテ夫々露佛外務大臣ニ左ノ通リ確言スヘキ旨訓令セリ。

『帝國政府ニ於テハ該宣言ヲ以テ極東ニ於ケル露佛兩國ノ平和的意圖ノ新徵證トシテ満足ヲ以テ之ヲ歓迎ス而シテ該宣言カ日英協約ノ主要目的竝ニ屢次聲明セラレタル露佛兩國ノ對清政策ト全然一致ヲ見ルニ於テ帝國政府ハ又之ヲ以テ東洋ニ於ケル一般ノ康寧ニトリ新規且ツ有力ナル保障ヲ與フルモノト信スルヲ喜フモノナリ』

露國政府ハ三月二十日ノ官報ニ前記宣言書ヲ公表スルト共ニ、右宣言ハ日英協約ニ關シ種々ノ風説及宣傳行ハレ居リ曩ニ支那ニ於ケル共同行動ヲ執レル際北京議定書ニ調印セル十一ヶ國ヨリ日英兩國力分離シ支那ニ對シ特別ノ關係ニ立ツモノナリ等トナスマノアルヲ以テ露佛兩國ノ態度ノ變更セサルコトヲ宣言シ之ヲ右關係諸國ニ聲明セントスル次第ナル旨ヲ記載セリ。

第四節 栗野公使ノ豫備的協議

韓國問題ニ關スル伊藤侯ト「ラムスドルフ」伯トノ私的交渉ハ前項ノ通りナルカ、帝國政府ハ明治三十年一月新任在露栗野公使ニ對シ、同公使着任ノ上ハ韓國問題ヲ我方にトリ満足ニ解決スル方法ヲ熱心ニ攻究シ極秘裡ニ將來ノ正式談判ノ基礎トナルヘキ豫備的性質ノ眞懸ナル協調ヲ遂クヘキ旨ノ訓令ヲ與ヘタルヲ以テ、同公使ハ着任以來露國ノ我方ニ對スル意嚮ヲ探ルニ努メタリ。

二月十二日栗野公使ハ露國外務大臣ニ對シ日英協約ニ付通知シタルカ、其後同月二十四日「ラムスドルフ」伯ハ栗野公使ニ對シ、日本政府ハ極東ニ於テ日露兩國ノ平和關係及兩國相互ノ利益ヲ擁護スルノ目的ヲ以テ露國ト坦懐且ツ友好的ナル協調ヲ遂ケンコトヲ眞實ニ希望スルヤ、又日英協約第四條ニ抵觸セシテ日露間ニ別約ヲ結フコト可能ナリヤト質問セリ。右ニ關シ三月十二日小村大臣バ栗野公使ニ對シ、日本政府ハ韓國問題ニ關シ露國ト坦懐且ツ友好的ナル協調ヲ遂クルコトヲ衷心ヨリ希望スルモノニシテ日英協約ハ右ノ希望ノ實現ヲ妨クルモノニ非ス、唯問題ハ此協調ノ満足ナル基礎及協商開始ノ好時機如何ナルカ露國政府内ニ内訌アルニ鑑ミ現今商議ノ成功ハ疑問ナルニ付事態ノ發展ヲ注意スヘキ旨ヲ訓令シタリ。而シテ三月十三日在京露國公使「イズヴァルスキイ」ハ小村大臣ト會談ノ際伊藤侯及「ラムスドルフ」伯間ノ意見ノ交換ニ付テハ委曲伊藤侯ヨリ承知シタルカ大臣ノ私見ヲ承知シ度旨申出テタルヲ以テ、大臣ハ自説ヲ留保スルト同時ニ帝國政府ニ於テハ從來常ニ韓國問題ニ關シ露國ト一層明確且ツ完全ナル協調ヲ遂クルコトニ賛成シ來リ而シテ右態度ハ何等變更ヲ受ケタルコトナキ旨ヲ確言セリ。

然ルニ日英協約ノ締結ヲ以テ「ウイック」、「ラムスドルフ」伯等ヲ攻撃セル露國武斷派ノ勢力モ其後漸次薄ラキ文治派勢力ヲ恢復セルヲ以テ最早協商ヲ開始スルモ不可ナラスト思惟シ、小村大臣ハ七月七日栗野公使ニ對シ、露佛宣言、滿洲條約ノ締結及佛國大統領訪露ノ如キ露國ノ對外政策ニ重大ナル關係アル三事件ハ(一)本件協商ヲ結ハント欲スル念慮又ハ其條件ニ關シ露國政府ノ意見ヲ變更スルノ結果アリタルヤ及(二)協商ノ基礎ニ關シ露國政府ハ現ニ如何ナル思想ヲ有スルヤノ二點ニ付公使自身ノ責任ヲ以テ絶対秘密裡ニ探ルヘキコトヲ電訓シタリ。

依テ七月二十三日栗野公使ハ「ラムスドルフ」伯ト一個人ノ資格ニ於テ意見ヲ交換セル處、同伯ハ日本ニシテ日英同盟ニ依リ妨ケラルニ非サル以上本件ニ關スル露國ノ希望ハ變更セル所ナク、又伊藤侯ノ意見及同伯ノ回答ヲ以テ協商ノ基礎トナシ得ヘシト述フルト共ニ其別荘ニ赴キ一夕熟談セント言ヘリ。

右別荘行ハ實現セラレナリシモ九月十四日栗野公使ハ訓令ニ基キ一個人ノ資格ニ於テ「ラムスドルフ」伯ト伊藤侯ノ提議ヲ會談ノ基礎トシテ意見ノ交換ヲナシタルモ、同伯ハ韓國又ハ滿洲ニ於ケル日露兩國ノ權利及勢力ノ均衡ヲ以テ基礎トスルコトシテ受諾セラルニ於テハ會議ニ取掛ルヘシ、然シ自分ハ皇帝ニ屬從シテ演習地及「クリミヤ」ニ旅行スルニ付十二月下旬迄待タレタシト述ヘ、尙日本ニ氣受良キ「ローゼン」男ヲ駐日公使ニ選任スル積ナルコトヲ語レリ。右會談ニ依リ露國側ノ意向明トナリタルニ依リ十一月一日小村外務大臣ハ政府ノ審議ヲ經タルニハ非サルモ左記ヲ以テ協商ノ骨子トシ度旨ヲ栗野公使ニ内示セリ。

一、清韓兩國ノ獨立領土保全及各國ノ商工的企業上所謂機會均等ノ主義ヲ維持スルコトヲ重ネテ言明シ置クコト

二、日露兩國ハ互ニ其韓國又ハ滿洲ニ於テ現ニ有スル利益ヲ認メ且ツ之カ保護上必要ノ處置ヲ執リ得ルコト

三、日露兩國ハ上記ノ利益ヲ保護スル爲必要ナルカ又ハ地方ノ騷亂ニ依リ國際的紛擾ヲ惹起スヘキ恐アル時ハ之ヲ鎮壓ノ爲出兵ノ權アルコトヲ認ムルコト

四、日本ハ韓國內政改革ノ爲助言及助力(軍事上ノ助力ヲモ込メ)ノ專權ヲ有スルコトヲ露國ニ於

五、韓國縱貫鐵道ト東清鐵道及牛莊鐵道トノ連絡ニ關シ露國ハ少クトモ妨礙ヲ與ヘサルヘキコト
尙右ノ内第四項ハ特ニ骨髓トモ言フヘキモノナルコトヲ附言セリ。然ルニ右訓令到着前栗野公使ハ
「ラムトドルフ」伯ト伊藤侯案ヲ基礎トシ意見ヲ交換シ、九月頃本省ニ何等ノ指令ヲ請ハスシテ左記ノ
私案ヲ露國側ニ提出シタリ。

栗野公使私案

- 一、清韓兩帝國ノ獨立竝ニ領土保全ヲ相互ニ保障スルコト
- 二、韓國領土ノ何レノ部分タリトモ戰事的又ハ軍略的ノ目的ニ使用セサルキコトヲ相互ニ保障スル
コト
- 三、露國ハ韓國ニ於ケル日本國ノ利益ノ優越ナルヲ承認スルヲ以テ韓國ノ事務ニモ亦該國ニ於ケル
平和的利益ニ係ル日本國ノ行動ニ干與セサルコトヲ保障シ而シテ日本國カ韓帝國ニ於テ左記ノ權
利ヲ執行スルコトヲ承認スルコト
- 甲、商業上及工業上ノ利益ヲ增進スル爲ノ行動ノ自由
- 乙、韓國カ善良政府ノ義務ヲ完行スルニ於テ之ニ助言ヲ與ヘ且ツ之ヲ助力スルコト
- 丙、叛亂若クハ何等國內紛擾ノ起テ韓國ニ對スル日本國ノ平和的關係ヲ侵迫スルトキハ必要ニ應
スル兵員ヲ派遣スルコト但該兵員ハ其任務ヲ果シ次第ニ撤退セラルヘキコト
- 丁、守備隊並ニ電信線及鐵道保護ノ爲既設ノ警察隊ヲ維持スルコト

四、日本國ハ一八九八年露國ヨリ日本政府ニ通告シタル所ノ旅順口及大連灣ノ租借ヲ承認シ且又滿

洲ニ於ケル露國ノ權利及利益ノ保護ノ爲ノ自由行動ヲ承認スルコト

五、日露兩國間ニ現存スル韓國ニ關スル總チノ約定ハ茲ニ終止シテ效力ヲ有セサルコト
右ニ關シ十一月二十日小村大臣ハ栗野公使ニ對シ右覺書提出ノ尙早ナリシコト及其他我方要望ト相容
レサル諸點ヲ指摘シ注意ヲ與フル所アリタルカ、翌三十六年一月五日更ニ右私案第一項ノ「相互保障」
ヲ「承認」ニ改ムヘキコト、第二項ノ我讓歩ニ關スルコトハ先方ノ提案ヲ俟テ考慮スルノ得策ナルコ
ト、第四項ニハ現在ノ鐵道ニ屬スル權利及利益ヲ保護スル爲ニ其行動ノ自由ヲ認ムルニ過キストノ意
味ナレハ鐵道ナル文字ヲ插入シ其趣旨ヲ明瞭ナラシムヘキコト等ニ付注意ヲ與ヘ、十一月一日附訓令
ノ第一、第三及第四項ノ大原則ニ付テハ毫モ讓歩ノ餘地ナキコトヲ深ク念慮ニ置キテ充分盡力セラル
ヘキ旨ヲ訓令シタリ。

然ルニ露國側ハ我方ノ態度探究ニ努メタル模様アリシモ本件協議ハ其後進行ヲ見ナリキ。

第五節 小村大臣ト「クロバトキン」大將トノ私談

露國陸軍大臣「クロバトキン」大將ハ浦潮、旅順等極東ニ於ケル露國軍隊檢閱旅行中本邦ニ來遊スルコ
トトナリ、浦潮ヨリ軍艦「アスコリド」ニ搭乗軍艦「ノヴィカ」ラ從ヘ明治三十六年六月十日下關ニ到着、
直ニ東上シ滯在三日ノ後神戸ヨリ乘艦長崎ヲ經テ旅順ニ向ヒ出發セリ。
當時滿韓問題ニ關シ日露ノ關係相當緊張セル際ニシテ同大臣滯京中日露間ニ協商締結セラレタリトノ
報外國ニ傳達セラレタルカ、右出所ハ東京二六新報ノ捏造ニ因ルモノナルコト判明セリ。小村外務大臣ハ同大將ト會見ノ際日露關係殊ニ兩國間話合ノ必要ニ關シ私談ヲナシタルカ其内容左ノ如シ。

「クロバトキン」將軍ハ先ツ何等公然ノ使命ヲ帶ヒサルヲ以テ其言説スル所ハ全然一己ノ資格ヲ以テ及浦潮ニ達スル鐵道ノ露國ニトリ重要ナルコト、隨テ此等鐵道ノ安固ヲ確保スルノ必要ナルコト、右鐵道敷設及維持費ノ莫大ナルコト、滿洲撤兵ニ關スル幾多ノ困難ノ露國政府ニ於テ慎重熟議中ニ屬スルモノアルコト等ニ付縷々辯明ニ努メタリ。於茲小村大臣ハ自分ノ私見トシテ、鐵道保護ノ事タル撤兵問題トハ全然別個ノ案件ニ屬シ清國ニ對スル露國ノ約束ト列強ニ對スル其證言トニ照シ吾人ハ滿洲撤兵實行ニ關スル露國ノ意圖ニ全幅ノ信用ヲ措クモノナリ、然ルニ近時滿洲ニ於ケル露國ノ行動ハ吾人ニトリ當然ノ憂慮ヲ惹起セリ、露國カ永久ニ滿洲ヲ占領スルハ(一)韓國ノ安全ニトリ不斷ノ迫害トナルヘク而モ韓國ノ獨立ト保全トハ日本カ萬難ヲ排シテ之ヲ擁護セント決心セル所ニシテ(二)又右ハ結局支那分割ノ端緒トナルヘク蓋シ此事タル他列強ヲシテ清國ノ他ノ部分ニ於テ其各自ノ勢域ト唱フル所ニ對シ同様ノ要求ヲナスノ口實ヲ得シムルモノナレハナリ、此故ニ最大緊切ナル利害關係ヲ有スル日露兩國タルモノハ兩國ニトリ等シク不利ナル上述ノ結果ヲ惹起スヘキ行動ハ一切之ヲ避ケル様注意セナルヘカラスト述ヘタリ。

「クロバトキン」將軍ハ清國分割ヲ不可トスルニ於テ小村大臣ト所見ヲ同フスト述フルト共ニ、乍去滿洲ニ於ケル露國ノ地位タル他ノ列強例へハ獨逸ノ山東ニ於ケルカ如キモノトハ相違スルコトヲ諒承アラソコトヲ望ム、韓國ハ露國ノ見地ヨリスレハ第二位ノ重要ナルノミ蓋シ韓國ハ隣邦ナルモ兩國ノ接壤距離僅少ナレハナリト云ヒ、且ツ露國ハ韓國ノ疆域ニ對シ何等ノ企圖ヲ有セアルコトヲ確言

シ、更ニ日本ト何等カノ協調ヲ遂シタシトノ希望ヲ繰返シ、日露兩國政府ハ坦懐ノ精神ヲ以テ此問題ヲ研究スルヲ得ンコトヲ望ミタリ。

第六節 日露戰爭ニ至ル滿韓ニ關スル日露交涉

第一項 帝國政府ノ交渉開始提議

明治三十六年四月滿洲ニ於ケル露國ノ第二次撤兵期ニ至リ、露國ニ於テハ其當路者ノ間ニ於テ永久占領ヲ主張スル一派カ勝ヲ占メタル結果ナルモノノ如ク逮ニ其態度ヲ一變シ啻ニ滿洲行政邊附及撤兵ヲ中止シタルノミナラス、清國ニ向テ新ニ滿洲ノ如何ナル部分モ他國ニ租賃、讓渡又ハ賣却セサルコト、蒙古ニ於ケル現政權狀態ヲ持續スルコト、滿洲ニ於テ新ナル港市ノ開放ヲ禁スルコト等種々ノ要求ヲ提出シ、韓國ニ於テモ四月十三日韓國政府ニ對シ明治二十九年獲得シタル森林利權ヲ利用スヘキヲ通知シ、五月上旬龍巖浦ニ土地ヲ租借シ、國境ニ於テモ活潑ニ侵略的行動ヲ敢テシ其野心ノ遂ニ那邊ニ底止スルヤフ疑ハシムルモノアリタリ。

此事態ニ對シ緊急適切ノ方策ヲ講スルニアラサレハ帝國國防ノ自衛線タル韓國ノ獨立及領土保全ヲ維持シ帝國ノ勢力ヲ確保シ難キニ至ルヘキヲ以テ、帝國カ從來執り來レル容忍ノ政策ヲ變更シ露國ト直接ノ交渉ヲ開キ、相互ノ利益ヲ友誼的ニ調理シテ東亞ノ和局ヲ恒久的ニ維持セんコトヲ期シ、六月六日小村外務大臣ヨリ開闢案ヲ提出シ、同月二十三日御前會議ニ於テ左ノ主義即チ

一、清韓兩國ノ獨立及領土保全並ニ商工業上機會均等ノ主義ヲ維持スルコト

二、日露兩國ハ互ニ其韓國又ハ滿洲ニ於テ現ニ保有スル正當ノ利益ヲ認メ之カ保護上必要ノ處置ヲ

執り得ルコト

三七〇

三、日露兩國ハ上記ノ利益ヲ保護スル爲必要ナルカ又ハ地方ノ騷亂ニヨリ國際的紛擾ヲ惹起スヘキ虞アル時ハ之ガ鎮壓ノ爲出兵ノ權アルコトヲ認ムルコト

但出兵ノ目的達セラレタル時ハ直ニ之ヲ撤スヘキコト

尤モ鐵道電線保護ノ爲必要ナル警察兵ハ此限ニアラス

四、日本ハ韓國內政改革ノ爲助言及助力ノ專權ヲ有スルコト

ヲ基礎トシ露國ト協約締結ノ爲交渉ヲ開始スルコトニ決セリ。

依テ帝國政府ニ於テハ日英同盟ノ精神ニ依リ先ツ英國政府ノ意図ヲ確ムルコトヲ必要ナリト認メ、七月一日在英林公使ニ電訓シ右ノ意見ノ大要ヲ極ク祕密ニ英國政府ニ示シ其賛同ヲ求メシメタルニ、同

政府ハ七月十六日林公使ニ對シ更ニ異議ナキ旨ヲ回答シタルニ依リ、帝國政府ハ進シテ露國政府へ交渉スルコトトシ即七月二十八日在露栗野公使ヘ電訓シ左ノ趣旨ノロ上書ヲ露國政府へ提出セシメタリ。

『日露兩國ノ關係上凡ソ將來誤解ノ因タルヘキモノヲ悉ク撤去スルノ希望ニ於テ露國政府ハ蓋シ日本政府ト相共ニ兩者利益ノ接觸スル方面ニ於ケル事態ヲ查覈スルハ日本政府ノ喜フ所ナリ、若シ此

本政府ト同感ナルヘシト信ス、是ヲ以テ茲ニ極東ニ於ケル兩國各自ノ特殊利益ヲ割定スルヲ期シ露國政府ト相共ニ兩者利益ノ接觸スル方面ニ於ケル事態ヲ査覈スルハ日本政府ノ喜フ所ナリ、若シ此

府ニ提出スル所アラントス』

栗野公使ハ七月三十一日露國外務大臣「ラムスドルフ」伯ニ右口上書ヲ手交シタル處、同大臣ハ從來屢々貴使ニ述ヘタル如ク日露兩國間ノ協調ハ單ニ願ハシキノミナラス又實ニ最良ノ策タリ且ツ兩國ニシ

第一條 滿韓兩帝國ノ獨立及領土保全ヲ尊重スルコト並ニ該兩國ニ於ケル各國ノ商工業ノ爲機會均等ノ主義ヲ保持スヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第二條 韓國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優勢ナル利益ヲ承認シ日本ハ滿洲ニ於ケル鐵道經營ニ就キ露國ノ特殊ナル利益ヲ承認シ併セラ本協約第一條規定ノ下ニ右劃定セラレタル兩國各自利益ヲ保護スルカ爲メニ必要ナル措置ヲ日本ハ韓國ニ於テ露國ハ滿洲ニ於テ執ルノ權利ヲ相互ニ承認スルコト

第三條 日露兩國ハ本協約第一條ノ條項ト背馳セサル限り韓國ニ於ケル日本及滿洲ニ於ケル露國ノ商業的及工業的活動ノ發達ヲ阻礙セサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

又今後韓國鐵道ヲ滿洲南部ニ延長シ以テ東清鐵道及山海關牛莊線ニ接續セシメントスルコトアルモ之ヲ阻礙セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト

第四條 本協約第二條ニ掲ケタル利益ヲ保護スルノ目的又ハ國際紛爭ヲ起スヘキ叛亂若クハ騷擾ヲ鎮定スル目的ヲ以テ日本ヨリ韓國ニ或ハ露國ヨリ滿洲ニ軍隊派遣ノ必要ヲ見ルニ於テハ其派遣ノ軍隊ハ如何ナル場合ニ於テモ實際必要ナル員數ヲ超ユ可カラナルコト且右軍隊ハ其任務ヲ果シ次第直ニ召還スヘキコトヲ相互ニ約スルコト

REEL No. 調-0047

0202

第五條 韓國ニ於ケル改革及善政ノ爲助言及援助（但シ必要ナル兵力上ノ援助ヲモ包含スルコト）ヲ與フルハ日本ノ專權ニ屬スルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト

第六條 本協約ハ滿洲韓國ニ關シテ日露兩國間ニ結ハレタル總テノ協定ニ替ハルヘキコト

第二項 露國政府ノ對案

露國外務大臣ハ在露公使ノ提出セル前記口上書ヲ受取り細心ニ查閱スヘシト答へタル儘何等ノ意見ヲ開示スルコトナク日ヲ經タルヲ以テ、栗野公使ハ訓令ニ依リ回答ヲ督促シタル處、八月二十三日同大臣ハ本件ニ關シテ「アレクセエフ」ニ移牒スヘキ細目ノ點モ多カルヘキヲ以テ便宜ノ爲豫備的商議ヲ東京ニ移シ追テ之ヲ露都ニ於テ確定ヘキコトヲ提議セリ。然レトモ斯クノ如クスル時ハ徒ニ時期ヲ遷延セシメ其他我ニ害アルモ益ナキヲ以テ、帝國政府ハ飽迄露都ニ於テ談判ヲ繼續セシコトヲ主張シ併セテ主義上我提案ヲ以テ談判ノ基礎ト爲スコトヲ數回繰返シ請求シタルモ、「ラムスドルフ」伯ハ皇帝ノ外遊等ヲ口實シテ談判地移轉ノ說ヲ固持シ且ツ露國對案ヲ東京ニ於テ提出シ彼我兩案ヲ以テ談判ノ基礎トナスヘキヲ主張セリ。

蓋シ先之八月十二日遼東租借行政總長兼陸海總司令「アレクセエフ」ハ極東太守トナリ、滿洲及樺東露領ノ事項ハ其管轄下ニ屬シ外交ニ至ル迄悉ク同太守ノ意見重キヲ爲スニ至レル等露國國內事情ニ變化アリタルヲ以テ「ラムスドルフ」伯モ頗ル窮境ニ陥リ遂ニ談判地移轉ヲ主張スルニ至リタルモノノ如ク、「アレクセエフ」太守ハ既ニ在日本「ローゼン」公使ト協議シ對案ヲ起草スヘキ勅命ヲ受ケタリ。事情クノ如クナルヲ以テ帝國政府ハ此上論議ヲ重ヌルモ其效益ナキヲ認メ終ニ談判ヲ東京ニ移スコトニ同意シ、九月七日露國政府ヘ一日モ速ニ其對案ヲ提出セシコトヲ要望セリ。而シテ「ローゼン」男モ

旅順ニ到リ協議シ、露國對案ハ漸ク十月三日「ローゼン」公使ヨリ提出セラレタルカ右提案左ノ如シ。

露國對案

第一條 韓帝國ノ獨立並ニ領土保全ヲ尊重スルコトヲ相互ニ約スルコト

第二條 韓國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優越ナル利益ヲ承認シ並ニ第一條ノ規定ニ背反スルコトナクシテ韓帝國ノ民政ヲ改良スヘキ助言及援助ヲ同國ニ與フルハ日本ノ權利タルコトヲ承認スルコト

第三條 韓國ニ於ケル日本ノ商業的及工業的企業ヲ阻礙セサルヘキコト及第一條ノ規定ニ背反セナル限リ右企業ヲ保護スルカ爲ニ取ラレタル總テノ措置ニ反對セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト

第四條 露國ニ知照ノ上右同一ノ目的ヲ以テ韓國ニ軍隊ヲ送遣スルハ日本ノ權利タルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト但右軍隊ノ員數ハ實際必要ナルモノヲ超過セサルヘキコト且右軍隊ハ其任務ヲ果シ次第直ニ召還スヘキコトヲ日本ニ於テ約スルコト

第五條 韓國領土ノ一部タリトモ軍路上ノ目的ニ使用セサルコト及朝鮮海峽ノ自由航行ヲ迫害シ得ヘキ兵要工事ヲ韓國沿岸ニ設ケサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第六條 韓國領土ニシテ北緯三十九度以北ニ在ル部分ハ中立地帶ト見做シ兩締約國孰レモ之ニ軍隊ヲ引入レサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第七條 滿洲及其沿岸ハ全然日本ノ利益範圍外ナルコトヲ日本ニ於テ承認スルコト

第八條 本協約ハ從前韓國ニ關シテ日露兩國ノ間ニ結ハレタル總テノ協定ニ替ハルヘキコト

右露國對案ハ専ラ韓國ノミニ關スルモノニシテ同國ニ於ケル我自由行動權ヲ極メテ制限のニ認メ、殊

ニ北緯三十九度以北即平壤、元山ヲ含ム朝鮮ノ約三分ノ一ヲ以テ中立地帯トナシ、滿洲ニ關シテハ絕對的ニ之ヲ日本ノ利益範囲外ト認メシムルノ外何等ノ約定ヲモ爲サナルモノニシテ當初協商締結ノ爲露國ト交渉シタル趣旨ト甚シク逕庭セルモノナリキ。於茲小村大臣ハ露國公使ヲ招致シテ十月六日、八日、十四日及二十六日ノ四回ニ亘リ會議辨論スル所アリタリ。

第三項 小村「ローゼン」會談

（第一回會見）

十月六日小村外務大臣ハ露國公使「ローゼン」男ヲ招致シ、時局問題ニ付腹議ナク懇親的ニ意見ヲ交換シ度前提シ、凡ソ協商ハ其性質恒久的ナルヘキコト及ノ程度迄双方ニ満足ヲ與フルモノタルヘキコトノ二要素ヲ具有スヘキヲ説キ、談判ハ兩國ノ提案ヲ基礎トスルコトニ付念ヲ押シ、大體ノ意見トシテ第一條ハ露國對案ト我案トノ間ニ重要ナル差異アル處清國ノ獨立及領土保全ヲ尊重スルコトハ露國自ラ屢次聲明シタル主義ニシテ我提案ハ新ナル條件ヲ強フルモノニ非ス此點ニ關スル兩國ノ主義ハ全然一致スルモノナリト思惟スル旨ヲ述ヘタルニ、「ローゼン」公使ハ滿洲ニ於テハ北清事變當時清兵先ツ國境ヲ侵シ露國ヲ攻撃シタル爲露國モ之ニ應戰シ其結果滿洲ヲ占領スルニ至リタルモノニシテ露國ハ征服者ノ権利トシテ之ヲ併呑スルトモ理論上異議ノアル筈ナキ旨異存ヲ申立テタルヲ以テ、小村大臣ハ北清事變ニ關スル露國ノ地位ハ列國ト異ル所ナク露國ノ出兵及其行動ハ決シテ征服ノ爲ニアラス、殊ニ滿洲併呑ノ意思ナキコトハ露國政府自ラ屢次宣明セル所ナル旨ヲ説明シタルカ、露國公使ハ該宣言ハ條件附ナリトテ理論上併呑ヲ實行シ得ヘキコトヲ主張セルモ、小村大臣ハ右條件ハ撤兵條約

ニ關スルモノニシテ併呑ニ關スル自制的宣言トハ別物ナリト反駁シタリ。

而シテ「ローゼン」公使ハ露國ハ朝鮮ニ於テ大ニ讓レルカ日本ハ之ニ對シ何物ヲ與フルヤト質問セルニ依リ、小村大臣ハ韓國ノ獨立ヲ維持スルハ帝國傳來ノ政綱ニ屬スル處滿洲ノ併呑ハ朝鮮ノ獨立ヲ脅シ延テ帝國ノ安危ニ關スルカ故ニ此點ニ關シ必要ノ保障ヲ得ル要アリ、且ツ滿洲ニ於テ日本ハ通商上及清國トノ條約上諸種ノ權益ヲ有スルニ依リ之カ安全ト平和ナル發達ニ對シテモ相當ノ保障ヲ得ナルヘカラサル旨ヲ述ヘタルニ、露國公使ハ滿洲ニ於ケル日本ノ商業上ノ利益ハ之ヲ認ムルモ右ハ清國トノ條約ニ依リ各國均等ノ取扱ヲ受クヘキヲ以テ特ニ保障ヲ要セスト言ヘルニ依リ、大臣ハ露國ノ撤兵條件中ニモ露國ノ承諾ナクシテ開港場ノ新設ヲ許ササル如ク露國ハ過去ニ於テ滿洲ニ於テ通商上ノ發達ヲ妨礙セントセル實例モアルニ付同時ニ露國ノ保障ヲ要スル旨ヲ主張シ、尙兩國ノ提案ヲ調和セシムル目的ヲ以テ良策ノ熟考ヲ求メテ當日ノ會見ヲ終レリ。

（第二回會見）

十月八日ノ會見ニ於テ小村外務大臣ハ團匪事變以來露國ハ清國ノ領土保全ヲ以テ其對清政策ノ根基ト爲スコトヲ屢次宣言シ進ンテ帝國政府ニ向テモ證言シタルコトアル處、清國ニ最モ緊切ナル利害關係ヲ有スルハ日露兩國ニシテ地理上ノ位置ヨリシテモ清國ノ領土保全ヲ完全ニ維持スルコトハ兩國ノ爲且ツ東亞全局ノ爲必要ナル所以ヲ説キタルニ、「ローゼン」公使ハ領土保全主義ヲ滿洲ニ及ホスハ露國ヲ拘束スルモノナリヤト質問セリ。依テ大臣ヨリ我方ハ右ノ主義ヲ確ニスルモノニシテ此主義ハ日露兩國一致スルモノナルニ依リ本協商ニ於テモ之ヲ認ムルコト差支ナキニ非スヤト云ヘルモ、「ローゼン」ハ理論上所謂征服者ノ権利トシテ之ヲ行フモ差支ナキコト及韓國ニ對スル讓歩ノ代

物如何ノ質問ヲ繰返シ、曩ニ西外務大臣ト自分トノ協商ノ際日本ハ滿洲ヲ露國ノ勢力範囲ニ委ヌルコトニ異議ナシトノコトナリシニ該案ハ成立セサリシモ自分ハ爾來斯ル協商ヲ試ミタキ希望ヲ有シ居タルコトヲ述ヘタルニ依リ、小村大臣ハ滿洲ノ現状ハ當時ニ比シ一大變化ヲ來シ當時露國ハ旅大二港ヲ租借シ南滿鐵道支線ヲ右兩港ニ延長スルノ権利ヲ有シタルニ遇キサリシカ、今日ハ滿洲全部ヲ捲有シ勢ヒ韓國ノ獨立ヲ脅カス結果トナレルヲ以テ此變化セル事情ニ應シテ措置セナルヲ得ナル旨説明セリ。

次ニ大臣ハ露國對案中ノ二三ノ用語ニ付質問シタル後中立地帶設定ニ關シ、右ハ主義トシテ惡カラナル考ナルモ現下朝鮮ニ於ケル日本軍隊ト滿洲ニ於ケル露軍ノ兵數ヲ比較セハ攻勢ヲトリ糧食ヲ企テ得モノハ露國側ナルニ依リ、若シ中立地帶ヲ設クルトセハ寧ロ滿洲方面カ然ラスンハ滿韓國境ヲ中心トシテ南北ニ設ケテハ如何ト述ヘ、滿洲及其沿岸ヲ日本ノ利益範圍外ト認ムルコトハ絶對ニ同意シ難キコトヲ確言シ、尙兩案ノ研究ト會見トヲ約シテ第二回ノ會見ヲ終レリ。

(第三回會見)

十月十四日小村大臣ハ「ローゼン」公使ニ向ヒ兩案中重要ナル箇條ニ付意見ヲ交換シ度トテ、露國案第

二條ニ「韓國ノ行政ヲ改良スヘキ助言及援助」トアリ右ハ軍政ヲモ含ムモノナリヤ明確ナラサルカ故ニ誤解ヲ避ケンカ爲ニ日本案ノ如ク「援助」ノ下ニ「軍事上」ノ援助ヲモ含ム」ノ一句ヲ附加スルコト及第三條ヲ我提案通トスルコトヲ提議シ、先方之ニ異議ナシト云ヒ、我方ハ第四條但書ノ削除ニ對スル修正ニ異議ナク、第六條ノ中立地帶設定ニ付テハ我方ニ主義上異存ナキモ國境ヲ中心トシテ之ヲ設クルコトトシテハ如何ト尋オタルニ、公使一己ドシテハ異議ナキニ依リ本國政府へ勸告スヘシ、但シ滿洲ニ

モ右地帶ヲ置クコトハ軍事上ニ關係ヲ有スルカ故ニ「アレクセエフ」大守ノ意見最モ重キヲ置カルヘク

其距離ハ短縮スルコトヲ要スヘシト云ヘリ。

次ニ大臣ハ第七條ニ關シ左ノ修正ヲ提示セリ。

第七條 滿洲ニ於ケル清國ノ主權及領土保全ヲ尊重シ並ニ滿洲ニ於ケル日本ノ商業上ノ自由ニ干涉

セナルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト

第八條 日本ハ滿洲ニ於ケル露國ノ特殊利益ヲ承認シ並ニ前項ノ規定ニ背反セサル限り右利益保護

ノ爲必要ナルヘキ措置ヲトルハ露國ノ權利タルコトヲ承認スルコト

第九條 今後韓國鐵道及東清鐵道ニシテ鴨綠江マテ延長セラルニ至ラハ該兩鐵道ノ連絡ヲ阻害セ

サルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

之ニ對シ露國公使ハ露國ハ、主義トシテ滿洲ニ關シテハ如何ナルコトニ付テモ他國ト約定ヲ結ハナルコトトセルニ付日本案ハ此主義ト背馳スルヲ以テ到底同意シ得ス、今回ハ露國ヨリ韓國ニ於テ讓歩シ其代物トシテハ第七條以外ニナク又露國案ハ日本カ五年前自ラ提出セルモノト同一ノモノニシテ此五年間ニ變化セル事態モ之ヲ認メタル上斯ク讓歩シタルモノナリト述ヘタルニ依リ、大臣ハ今回ノ交渉ヲ開始シタル精神ハ之カ解決ニヨリ將來兩國ノ親善ヲ妨ケ又ハ互ニ誤解ヲ生スヘキ一切ノ原因ヲ滅却センカ爲ノ大局的考慮ニ基キタルモノニシテ決シテ商估的取引ニアラサルニ依リ其精神ヲ以テ考量セラレ度トノ趣旨ヲ説キタルカ、先方ハ頑トシテ讓ラス反覆論議セルモ何等ノ結果ヲ見サリキ。

(第四回會見)

十月二十六日ノ會見ニ於テ小村大臣ヨリ、時局ノ危険ハ一時モ速ニ本問題ヲ終了セシムルコト兩國ニ

トリ緊要ニシテ兩國政府モ交渉ノ當初ヨリ此精神ヲ以テ事ニ當リタル次第ナルニ付兩人ニ於テモ同上ノ精神ヲ以テ商議スヘキモノナリトテ双方ノ調和ヲ圖ラシコトヲ希望シ、若シ當地ニ於テ互ニ意見ノ一致ヲ見ル能ハサレハ其結果ヲ以テ交渉ヲ露都ニ移スニ至ルヘシト述ヘ、我政府カ滿洲ニ關シテ露國ニ求ムル所ハ新奇ノコトニアラスシテ前年三月ノ露國政府宣言ノ如ク清韓兩國ノ領土保全ヲ維持スル主義ヲ茲ニ認メントスルモノナル旨ヲ更ニ繰返シタルモ、「ローゼン」公使ハ前記陳述ヲ反覆シ依然第七條修正案ニ不同意ヲ表シタルニ依リ、小村大臣ハ露國案第七條ヲ其儘採用スルニ於テハ他日清國トノ條約上ノ利權ヲ妨害セラル場合ニ於テ清國政府ニ對シテハ故障ヲ唱ヘ得ヘキモ露國政府ニ對シテハ之ヲ唱フルヲ得ス即露國ニ對シテハ全然我條約上ノ利益權利ヲ無視スルノ結果ヲ生スルカ故ニ我方ハ之ニ同意スル能ハス、蓋シ露國ハ滿洲ト韓國トヲ全然同地位ニ置クノ覺悟アリヤ若シ果シテアリトセハ我政府ニ於テモ露國案第七條ヲ考慮スルコトモアルヘシト詰メ寄リタルカ、「ローゼン」公使ハ訓令以外ノコトナレハ意見ヲ述フル能ハナル旨申立テタリ。於茲大臣ハ然ラハ友人間ノ懇話トシテ公使一己ノ意見ヲ聞カシコトヲ望ミタルニ、「ローゼン」男ハ私見トシテ、若シ韓國領土ヲ軍事上ノ目的ニ使用セサルコト並ニ朝鮮海峽ノ自由航行ヲ迫害セサルコトノ二條件ヲ存スルニ於テハ考慮ノ價値アリト思惟スル旨答ヘタリ。

次ニ公使ハ一己ノ意見トシテ、第四條ノ修正案ニ異議ナク又我修正案中ノ韓國內ノ秩序維持ノ爲ニモ出兵ノ權アルコトヲ認メ、加フルニ軍隊ノ員數及駐留ニ關スル制限ヲ廢シタルコトニモ異議ナク本國政府ニ其承諾ヲ勧告スヘシト明言シ、第六條ノ中立地帶ニ付テハ兩側各五十糠トスルコトニ異議ナキモ之ニハ「アレクセエフ」大守ノ意見重キヲ爲スヘシト答ヘタリ。

斯クシテ會見四回ニ亘リ反覆辯論セルモ滿洲ニ關シテハ何等意見ノ一致ヲ見ルニ至ラサリキ。

第四項 日本確定修正案ト露國修正對策

一、日本側修正案

前項ニ述ヘタル小村外務大臣「ローゼン」公使間ノ意見交換ノ結果帝國政府ハ英國側ノ意見ヲモ徵シタル上、十月三十日左記確定修正案ヲ露國公使ニ交付セル處、翌日同公使ハ右ハ受有セル訓令ノ範圍外ニ屬スルヲ以テ該案ノ全文ヲ本國政府ニ電報シ何分ノ訓令ヲ請フヘキ旨ヲ告ケタリ。

日本修正案

第一條 清韓兩帝國ノ獨立及領土保全ヲ尊重スルコトヲ相互ニ約スルコト

第二條 露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優越ナル利益ヲ承認シ並ニ韓帝國ノ行政ヲ改良スヘキ助言及援助（但軍事上ノ援助ヲ含ム）ヲ同國ニ與フルハ日本ノ權利タルコトヲ承認スルコト

第三條 韓國ニ於ケル日本ノ商業的活動ノ發達ヲ阻礙セサルヘキコト及此等利益ヲ保護スルカ爲ニ取ラルヘキ總テノ措置ニ反對セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト

第四條 前條ニ掲ケタル目的又ハ國際紛爭ヲ起スヘキ叛亂若クハ處置ヲ鎮定スルノ目的ヲ以テ韓國ニ軍隊ヲ派遣スルハ日本ノ權利タルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト

第五條 朝鮮海峽ノ自由航行ヲ迫害シ得ヘキ兵要工事ヲ韓國沿岸ニ設ケサルヘキコトヲ日本ニ於テ約スルコト

第六條 韓國ト滿洲トノ境界ニ於テ其兩側各五十糠ニ亘リノ中立地帶ヲ設定シ右地帶内ニハ締約國執レモ相互ノ承諾ナクシテ軍隊ヲ引入レサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第七條 満洲ハ日本ノ特殊利益ノ範圍外ニ在ルコトヲ日本ニ於テ承認シ韓國ハ露國ノ特殊利益ノ範圍外ニ在ルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト

第八條 日本ハ滿洲ニ於ケル露國ノ特殊利益ヲ承認シ並ニ此等利益ヲ保護スルカ爲ニ必要ナル措置ヲ取ルハ露國ノ權利タルコトヲ承認スルコト

第九條 韓國トノ條約ニ因リ露國ニ屬スル商業上及住居上ノ権利及免除ヲ妨礙セサルヘキコトヲ日本ニ於テ約スルコト並ニ清國トノ條約ニ因テ日本ニ屬スル商業上及住居上ノ権利及免除ヲ妨礙セサルヘキコトヲ日

第十條 今後韓國鐵道及東清鐵道ニシテ鴨綠江マテ延長セラルルニ至ラハ該兩鐵道ノ連絡ヲ阻害セサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第十一條 本協約ハ從前韓國ニ關シテ日露兩國ノ間ニ結ハレタル總テノ協定ニ替ハルヘキコト要之右修正案ハ滿韓兩地ニ亘リテ彼我ノ權益ヲ精確ニ且ツ相互的ニ規定スルニ在リ、即第一條ニ於テ「韓帝國」ヲ「清韓兩帝國」ト改メ、第二條ニ於テ民政ハ軍政ヲ含マサルカ故ニ「行政」ト改メ且ツ「助言及援助」ノ下ニ「但軍事上ノ援助ヲ含ム」ナル但書ヲ添ヘテ他日ノ誤解ヲ防キ、第三條ハ單ニ文字ノ修正ニ止リ、第四條ハ韓國ヘ出兵ノ場合ニ於テ豫メ露國ヘ通知スルコト及軍隊ノ員數並ニ駐留期ニ關スル制限ヲ除キ、第五條ハ其前半即「韓國領土ノ一部タリトモ軍略上ノ目的ニ使用セサルコト」ノ一句ヲ削リ、第六條中立地帶ヲ韓國ノミニ設クルハ甚タ不當ナルカ故ニ滿韓境界ヲ中心トシテ其兩側各五十杆ヲ中立地帶トナスコトニ修正シ、第七條ニ於テハ滿洲ヲ日本ノ特殊利益ノ範圍外ナリト認ムルト同時ニ韓國ヲ露國ノ特殊利益範圍外ト認メシメ以テ其規定ヲ相互的ニセリ。第八條ハ第二條及第

三條ト相俟チ日露兩國共互ニ其韓國又ハ滿洲ニ於ケル特殊利益及其保護權ヲ認ムルモノニシテ、第九條ハ日本提案第一條ノ後半即清韓兩國ニ於ケル各國商工業上機會均等ノ主義ヲ維持スルコトノ規定ヲ斯ク書改メタルモノナリ。又第十條ハ日本提案第三條第一項ニ該當スルモノニシテ最初ハ韓國鐵道ヲ滿洲ニ延長スルノ規定トナリ居リタルモ露國政府ハ飽迄之ニ反對スヘキ形勢アリ且ツ帝國政府ノ目的モ主トシテ連絡ノ一點ニ在ルカ故ニ本條ノ如ク修正シテ之ヲ加ヘタルナリ。而シテ右ノ内第二條、第四條及第六條ノ修正ハ「ローゼン」公使ニ於テモ曩ニ會見ノ際一己ノ意見トシテハ異議ナキ旨ヲ述ヘタルモノナリ。

小村大臣ハ右修正案ヲ在京露國公使ニ手交スルト共ニ、十一月一日在露栗野公使ニ電訓シテ「ラムスドルフ」旅行不在中ニ付其代理ニ之ヲ手交シ次ノ諸點ヲ申入レシメタリ。
 「本修正案ノ作成ニ當リ帝國政府ハ露國政府ノ希望ヲ充分酌量セリ、日本政府カ韓國ト同様ニ清國ノ獨立及領土保全ヲ尊重スヘシトノ相互的約定ヲ提議シタル所以ハ露國カ現ニ任意ニ與ヘタル聲明ノ確認ヲ得ントスルマテニシテ露國カ韓國ニ關シテ右様ノ約定ヲ爲サンツルノ意ナルニ顧ルトキハ其清國ヲ除外セントスル理由ニ苦シム所ナリ、抑々滿洲問題カ帝國ノ權益ニ關涉セサル限り日本政府ハ之ヲ斷然タル露清間ノ案件タルヲ認メントス、然レトモ日本ハ該地方ニ於テ廣大且ツ重要ナル權益ヲ有スルカ故ニ滿洲ヲ以テ其特別ノ利益ノ範圍外ト宣言スルニ當リ對清條約上日本ニ屬スル通商上及居住等ノ權利ト免除ニ對シ妨礙ヲ加ヘサルヘキ旨ノ保障ヲ露國ニ求ムルハ日本政府ノ至當トスル所ナリ、今回ノ商議ノ基因タル日本政府提議ノ主意ハ極東ニ於テ日露ノ利益相接觸スル地方ニ於ケル兩國ノ特別利益ヲ劃定セントスルニ在リ、露國政府カ右ノ提議ニ應スルニ當リ露國對案第七

條ヨリ推測セラル通リ日本カ特別利益ヲ有スル地方ノミニ限リ右劃定ヲ欲スルコトハ豫期セナリシ所ナリ、日本政府ニ於テハ深ク日露兩國ノ當面ノ問題ノ満足ナル解決法ヲ見出シ以テ今回ノ協商不調ニ歸シ隨テ難局ヲ來スカ如キヲ避ケルノ肝要ナルヲ認ム、尙日本政府ハ妥協ノ精神ヲ以テ時局ニ處スル意向ニシテ露國政府モ亦其見ル所ヲ同シク「ローゼン」公使ニ訓電シテ同公使ヲシテ現下ノ協商ヲ満足ニ終局スルヲ得シメラレンコトヲ希望ス』

二、露國ノ對案

其後露國外務大臣「ラムスドルフ」伯ハ外國旅行ヨリ歸國シタルニ依リ栗野公使ハ訓令ニ依リ再三回答ヲ督促シタルモ、先方ハ皇帝ノ還幸ナキコト、皇后病氣等種々ノ理由ノ下ニ回答ヲ遷延セルカ、右理由ノ外國內當路有力者間ニ於ケル意見不一致、外務省ト極東大守トノ關係等アリ、此ノ間露國ハ日清條約ヲ以テ外國貿易ノ開放地ト定メラレタル奉天ヲ占領シ旅順ニ於ケル要塞ノ工事ヲ急キ滿洲ニ於ケル戰備ヲ整ヘツツアリタルカ、漸ク十二月十一日ニ至リ在京露國公使ハ其修正對案ヲ提出シ來レリ。右露國修正案ハ八ヶ條ニシテ滿洲ニ關スル條項ヲ全然削除シ本協商ヲ以テ純然タル韓國協商トナシ、又韓國ニ關シテハ「ローゼン」公使ト一應ノ協議經リタル諸點ヲモ拒否シ、露國原案第二條中「助言及援助ヲ與フ」ルコトヲ「助言ヲ以テ援助ス」ルコトニ改メ、而シテ同條中ノ「民政」ノ二字、第五條ノ前半及第六條ハ依然トシテ原案ヲ固持シ、韓國ニ於ケル日本ノ自由行動ヲ減殺シ之カ實行ヲ不可能ナラシムモノアリ。

然ルニ本協商ノ範圍ヲ全然韓國ニ限ル時ハ問題ノ一半ハ未タ解決セラレシテ日露間ニ於ケル衝突ノ原因猶存留スヘク協商締結ノ趣旨ニ副ハサルヲ以テ、十二月二十一日小村大臣ハ「ローゼン」公使ニ向

テ露國政府ノ再考ヲ求メ、韓國ニ關シテハ領土使用上ノ制限ヲ削除スルコトヲ重ねテ要求シ、中立地帶ニ付テハ露國ニ於テ之ヲ滿洲ニ跨ランシムルコトニ不同意ナル以上韓國ニモ之ヲ設ケサルヲ至當トスルカ故ニ之ヲ全廢スルコトトシ、露國ノ修正案ニ對シ更ニ左ノ修正方ヲ提議セリ。

一、第二條「民政」ヲ「行政」ニ、「助言ヲ以テ援助ス」ルコトヲ「助言及援助ヲ與フ」ルコトニ改ムルコト

二、第五條前半及第六條全文ヲ削除スルコト

之ト同時ニ小村外務大臣ハ在露公使ニ電訓シテ露國外務大臣ニ對シ、露國政府カ原案ヲ固執シ更ニ小村大臣ト「ローゼン」公使トノ間ニ一應協議經リタル諸點ヲ捨テ、殊ニ本協商ノ範圍ヲ日本カ必要不可缺トナス區域ニ及ホストコトニ同意セサリシハ遺憾トスル所ナリ、帝國政府ハ當初ヨリ極東ニ在テ日露兩國ノ利益相接スル各地方部面ハ悉ク之ヲ本協商ノ域内ニ置カントスル希望ヲ有シ居リ、此重要ナル一地方ヲ除外スルトキハ不當ノ推測ヲ喚起シ紛議ヲ豫防セシヨリハ却テ之ヲ釀發スルコトトナルヘン斯ク帝國政府ハ出來得ル限リノ和協ノ精神ヲ以テ本問題ノ全體ヲ處理セント努ムルト共ニ他面一層断乎タル行動ヲ執ルノ已ムヲ得サルニ至ル場合ニ處スヘキ内外ニ對スル準備ヲナシツアリシカ、翌一年一月六日「ローゼン」公使ハ本國政府ノ訓令ニ基キ口上書ヲ以テ左ノ趣旨ヲ回答シ來レリ

二、第五條及第六條ハ露國原案ヲ維持スルコト

三、右ニ對スル日本政府ノ同意ヲ條件トシテ露國政府ハ左ノ趣旨ノ一ヶ條ヲ加フルコトヲ承諾スル

「滿洲及其沿岸ハ日本ノ利益範圍外ナルコトヲ日本ニ於テ承認スルコト 同時ニ露國ハ滿洲ノ區域内ニ於テ日本又ハ他國カ其清國トノ現行條約ノ下ニ獲得シタル權利及特權(但居留地設定ヲ除ク)ヲ享有スルコトヲ阻礙セサルヘキコト」
右ノ如ク露國ハ茲ニ至リテ始メテ滿洲ニ於ケル各國條約上ノ權利ヲ尊重スルトノ一事ヲ協商中ニ加フルコトヲ承諾セルカ、滿洲ノ領土保全ニ關シテハ毫モ言及スル所ナキノミナラス第五條及第六條ニ關シテモ頑強ニ其本來ノ主張ヲ堅持シテ讓ラサリキ。

第五項 帝國政府ノ最終修正案

本協商ニ對スル露國ノ態度前記ノ通リナルヲ以テ帝國政府ニ於テハ右對案ニ付審查熟議ノ結果、出來得ル限り露國ノ主張ヲ容レ是以上退讓ノ餘地ナキ方針ヲ決定シ更ニ露國政府ノ再考ヲ求ムルコトセルモ、若シ露國ノ回答ニシテ不當ニ遷延スルカ又ハ不滿足ナルニ於テハ不得已自衛ノ爲致ニ滿韓ニ於ケル帝國ノ既得權及正當利益ヲ擁護スル爲最後ノ手段ニ訴ヘナルヘカラサル處右ハ固ヨリ國家ノ安危ニ關スル至重至大ノ事ナルヲ以テ極メテ慎重周密ニ利害ヲ考覈シ、一月十二日御前會議ニ於テ廟議ヲ決定シ、翌十三日「ローゼン」公使ニ左記要領ノ最終修正案ヲ交付シタリ。

日本最終修正案ノ要旨

- 一、韓國ニ關シテハ毫モ退讓ノ餘地ナキカ故ニ我修正ヲ維持シ露國ノ主張ニ係ル第五條前半及第六條全文ヲ削除スルコト
- 二、滿洲ニ關シテハ左ノ修正ヲ以テ露國ノ提議ヲ容ルルコト

滿洲及其沿岸ハ日本ノ利益範圍外ナルコトヲ日本ニ於テ承認スルコト、但露國ハ滿洲ノ領土保全ヲ約スルコト

露國ハ滿洲區域内ニ於テ日本又ハ他國ト其清國トノ現行條約ノ下ニ獲得シタル權利及特權ヲ享有スルコトヲ阻礙セサルヘキコト

韓國及其沿岸ハ露國ノ利益範圍外ナルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト

三、露國對案ニ左ノ一條ヲ加フルコト

日本ハ滿洲ニ於ケル露國ノ特殊利益ヲ承認シ並ニ此等ノ利益ヲ保護スル爲ニ必要ナル措置ヲ執ルハ露國ノ權利タルコトヲ承認スルコト

四、居留地設定ニ關スル制限ハ追加日清通商航海條約ト抵觸スルカ故ニ之ヲ削除スルモ本件ニ關シテ他國モ既ニ同様ノ權利ヲ有シ居ルカ故ニ日本ハ他國ト均一ノ取扱ヲ受クレハ之ニ満足スルコト同時ニ小村外務大臣ハ在露栗野公使ニ訓令シ露國政府ニ對シ右修正案ヲ口上書ニ認メ且ツ此上時局ヲ遷延セシムルハ兩國ノ爲甚々危險ナルヲ以テ速ニ露國ノ回答ヲ望ム旨ヲ附記シテ提出セシメタリ。當時歐洲各方面ヨリ頻リニ露國ハ平和的ナルヲ以テ日露協商ハ成立スルナラントノ情報アリタルモ、露國ハ滿洲ニ於テハ水陸ノ兵備ヲ増強シ韓國々境ニ大兵ヲ送リ、他方號レモ失敗セリトハ云ヘ北京ニ於テハ日本トノ交渉ニ滿洲問題ヲ排除スヘク支那ト協定セントシ京城ニ於テハ利權獲得ヲ畫策シタリ。然ルニ我修正案ニ對スル露國政府ヨリノ回答ハ容易ニ來ラス、時局ハ本問題解決ニ於テ遷延ヲ許サヌモノアリシヲ以テ一月二十六日小村大臣ハ栗野公使ヲシテ、帝國政府ノ考フル所ニ依レハ此上時局ノ遷延スルハ益々其重大ヲ加フル所以ナルヲ以テ速ニ回答ヲ切望スル旨ヲ言明シ回答期限指定方ヲ申

入レジメタリ。

三八六

之ニ對シ「ラムスドルフ」伯ハ一月二十八日陸海軍兩大臣其他關係官憲ト會議シ其結果裁定ヲ仰ク豫定ナルカ「アレクセエフ」大守ノ參加ハ見合セトナリ多分電報ニテ意見ヲ申來ルヘキ處回答ハ甚シク遲ルルコトナカルヘシト答ヘ、其後我方ノ督促ニ對シ二月二日「アレクセエフ」及「ローゼン」ヨリ電報アラハ直ニ通知スベシ等答ヘタルモ、同月三日小村大臣ハ栗野公使ニ最早督促スルニ及ハサル旨ヲ内訓セリ。

而シテ二月四日夜露國外務大臣ハ栗野公使ニ來訪ヲ求メ、露國回答ノ要旨ハ只今「アレクセエフ」大守ニ發電シ置キタル處右ハ大守ヨリ「ローゼン」公使ニ轉送セシムル筈ナリ、同大守ニ於テ地方ノ情況ヲ斟酌シテ多少ノ修正ヲ加フルコトハ保シ難キモ多分變更ヲ加ヘサルヘシト告ケ、又同大臣ハ私見トンテ、露國ハ韓國ノ獨立及領土保全ノ原則維持ヲ希望スルト同時ニ朝鮮海峽ノ自由航行ヲ必要トス、露國ハ出來得ル限リノ讓歩ヲナズヘキモ露國ニ對スル戰略上ノ目的ノ爲ニ韓國ノ利用セラルヲ欲セス、且又日露間ニ良好ノ關係ヲ確立スル爲ニハ兩國ノ合意ヲ以テ極東ニ於ケル兩國ノ直接勢力及行動ノ範圍ノ間ニ緩衝地帶設定ノ有利ナルヲ信スル旨ヲ述ヘタリ。

斯クシテ露國ニ反省ノ色ナク其回答來ラサル中ニ我方ハ遂ニ決然タル措置ニ出テ談判停止ヲ通告セリ。

第六項 談判停止及外交斷絕

露國政府ノ回答ハ依然トシテ來ラス、帝國政府ハ現下ノ時局ヲシテ更ニ遷延セシムルコトハ之ヲ忍容スヘキニ非サルヲ以テ露國トノ懸案談判ヲ斷絶シ自衛並ニ既得權及正當利益擁護ノ爲獨立行動ヲ採ル

ノ已ムナキニ至リ、遂ニ二月四日午前開議決定シ、同日午後御前會議ニ於テ左記ニ依リ 御裁可ヲ得タリ。

『目下ノ形勢ハ急速ニ時局ヲ解決スルノ必要アルヲ以テ帝國政府ハ曩ニ最終提議ヲ爲セシヨリ以來數次露國政府ノ回答ヲ促せり然ルニ露國政府ハ言ヲ左右ニ托シテ未タ何等ノ回答ヲ與ヘサルノミナラス之ヲ與フヘキノ時期スラ指定セス蓋シ露國當路者中意見ノ一致シ難キ事情アルヘキモ彼等ハ此時期ヲ利用シテ頻ニ平和ヲ唱道シ大ニ讓歩ノ說ヲ流布シテ他國ノ同情ヲ買ヒ或ハ進シテ我邦ニ對シ調停ヲ試ミンモノトスルノ形跡アリ殊ニ表面平和ノ態度ヲ裝ヒツツ窃ニ滿洲ニ於ケル兵備ヲ嚴ニシ或ハ恐黃熱ヲ煽動シテ列國ノ同情ヲ我邦ヨリ奪ハントス其言行ノ一致セサルコト此ノ如ク要スルニ露國ハ誠心誠意我邦ト妥協ノ意ナク自己ノ利益ノ爲メニ回答ヲ遷延スルモノニシテ若シ此上時日ヲ空過スル時ハ我邦ハ外交軍事共ニ回復スヘカラナルノ不利ニ陥ルヘキコト疑フ容レス事茲ニ至リテハ實ニ已ムヲ得サルカ故ニ帝國政府ハ此上談判ヲ繼續スルモ妥協ニ至ルノ望ミナキヲ以テ之ヲ断絶シ自衛ノ爲メ竝ニ帝國ノ既得權及正當利益ヲ擁護スル爲必要ト認ムル獨立ノ行動ヲ取ルヘキコトヲ露國ハ通告シ併セラ軍事行動ヲ取ルコトヲ緊要ナリト思考ス尤モ右通告ヲ爲スノ時期ハ軍事計畫ト極メテ緊密ノ關係アルヲ以テ該計畫ト併考シ之ヲ決定センコトヲ要ス』

右廟議決定ニ基キ二月五日小村外務大臣ハ在露公使ニ左記趣旨ノ覺書ヲ露國外務大臣ニ提出スヘキヲ訓令セリ。

『日本國皇帝陛下ノ政府ハ韓國ノ獨立及領土保全ヲ以テ自國ノ康寧ト安全トノ爲メニ緊要缺クヘカラモノナリト思惟ス故ニ如何ナル行爲タルヲ問ハス苟モ韓國ノ地位ヲ不安ナラシムルモノハ帝

三八七

REEL No. 調-0047

0209

REEL No. 調-0047

0210

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Materials
<http://www.jacar.go.jp>

國政府ニ於テ之ヲ看過スル能バズ

三八八

露國政府カ韓國ニ關スル日本ノ提案即チ帝國政府ニ於テハ之カ採用ヲ以テ韓國ノ存立ヲ確實ニシ竝ニ該半島ニ於ケル帝國ノ優越ナル利益ヲ擁護スル爲メ緊要不可缺ト思惟スル提案ニ對シ到底妥協ノ望ナキ修正ヲ提出シテ執拗ニ之ヲ拒絕シタルコト並ニ又露國カ其清國トノ條約及滿洲地方ニ利益ヲ有スル他ノ諸國ニ對シ累次與ヘタル保障ノ存在スルニ拘ハラス依然該地方ノ占領ヲ繼續シ爲メニ甚タシク侵迫ヲ蒙レタル滿洲領土保全ノ尊重ヲ約スルコトヲ執拗ニ拒否シタルコトハ帝國政府ヲシテ自衛ノ爲メ其取ルヘキ手段ヲ慎重ニ考量スルノ已ヲ得サルニ至ラシメタリ露國ニ於テ了解シ得ヘキ理由ナクシテ屢次回答ヲ遷延シ加フルニ平和ノ目的トハ調和シ難キ軍事的活動ヲ爲セルニ拘ハラス帝國政府カ現交渉中用ヒタル耐忍ノ程度ハ其露國政府トノ關係ヨリ將來誤解ノ一切ノ原因ヲ除去セんコトヲ忠實ニ希望シタルコトヲ十分證シ得テ餘アリト信ス而モ帝國政府ハ其盡力ノ結果帝國ノ穩當且無私ナル提案若クハ又極東ニ於テ鞏固且恒久ノ平和ヲ確立スルニ近キ如何ナル他ノ提案ニ對シテモ露國政府ノ同意ヲ得ルコトハ毫モ其望ナキヲ頗得シタルカ故ニ現下ノ徒勞ニ屬スル談判ハ之ヲ斷絶スルノ外他ニ選フヘキ途ヲ有セス

帝國政府ハ右ノ一途ヲ採用スルト同時ニ自ラ其侵迫ヲ受ケタル地位ヲ鞏固ニシ且之ヲ防衛スル爲竝ニ帝國ノ既得權及正當利益ヲ擁護スル爲最良ト思惟スル獨立ノ行動ヲ取ルコトノ權利ヲ保留ス」
次テ二月五日帝國政府ハ露國ト外交關係ヲ斷絕スルニ決シ、在露栗野公使ヲシテ左記趣旨ノ記名覺書ヲ露國外務大臣ニ提出スヘキ旨電訓シタリ。

『日本帝國政府ハ露西亞帝國政府トノ關係上將來ノ紛糾ヲ來スヘキ各種ノ原因ヲ除去センカ爲有ラ

ユル和協ノ手段ヲ盡シタルモ其效ナク帝國政府カ極東ニ於ケル鞏固且恒久ノ平和ノ爲ニナシタル正當ノ提言並ニ穩當且無私ナル提案モ之ニ對シテ當ニ受クヘキノ考量ヲ受ケス從テ露國政府トノ外交關係ハ今ヤ其價値ヲ有セサルニ至リタルヲ以テ日本帝國政府ハ其外交關係ヲ断ツコトニ決定シタリ

下名ハ更ニ本國政府ノ命ニ依リ來ル十日ヲ以テ帝國公使館員ヲ率イテ露京ヲ引揚クルコトヲ茲ニ併テ「ラムスドルフ」伯ニ通告スルノ光榮ヲ有ス』

二月六日午後四時栗野公使ハ「ラムスドルフ」大臣ニ右公文ヲ手交シ、十日館員等ト共ニ露都ヲ引揚ケタリ。而シテ東京ニ於テハ二月八日在本邦露國公使「ローゼン」男ニ知照シ兩國ノ外交關係ハ既ニ斷絕シタルニ付本邦ニ於ケル同公使ノ任務モ茲ニ終了シタル旨ヲ通告シ、同月十日對露斷交ノ詔勅下リ

尙右露國トノ外交斷絕ニ付テハ二月六日帝國政府ヨリ獨佛伊等駐劄帝國公使ヲシテ夫々任國政府ニ通知セシス、英國ニ對シテハ右ノ外、帝國政府ハ紛糾ヲ日露兩國間ニ局限セシカ爲ニ全力ヲ竭シタル處英國政府ニ於テモ第三國ノ干渉ハ其形式名義ノ如何ヲ問ハス之ヲ防遏スルニ盡力セラレンコトヲ切タリ。

韓國ハ滿洲經營ヲ盛ニシタルモ朝鮮ニ於ケル活動ハ之ヲ止メタルニ非ス、就中滿洲ト浦潮方面トノ聯絡ノ中繼地トシテ韓國港灣ヲ占守セントシ森林利權事業ヲ再興スル等軍事上將又政治上經濟上其勢力

三八九

ヲ擴張、ゼンコトヲ企テ我方權益ヲ侵蝕スルモノアリタルヲ以テ直接間接幾多ノ日露關係問題ヲ惹起セリ。依テ明治三十二年頃ヨリ日露開戦ニ至ル迄生起セル其重ナルモノニ付左ニ略述スヘシ。

第一項 鎮海湾ニ於ケル露國海軍根據地設置問題

一、巨濟島不割譲及栗九味租借問題ノ經緯

明治三十二年三月露國海軍將校中ニ露國カ東洋ニ於テ霸權ヲ獲ルニハ浦潮旅順間ニ於テ海軍根據地トシテ朝鮮南岸巨濟島ヲ占領スルヲ要スル旨ノ建議書ヲ其筋ニ提出セルモノアリテ海軍部内ニハ之ニ共鳴スルモノアリ露帝モ之ヲ容レ外交手段ニ依リ韓國政府ヨリ同島及附近港灣ヲ借領セントノ情報アリシヲ以テ帝國政府ハ出先官憲ニ事實ノ調査ヲ命シタリ。七月在韓林公使ハ巨濟島及附近諸島ヲ漁業及產業上ノ目的ヲ以テ二十五年間ノ期限ニテ租借スルノ準備ヲナシ、九月十三日韓帝ニ謁見ノ際巨濟島租借方ヲ申入レタルニ、皇帝ハ日本ニ之ヲ許セハ他國ヨリモ同様ノ申出アルヘキニ付困難ナル旨ヲ述ヘタルカ、同公使ハ外部大臣ニモ日本漁業協會ニ於テ右諸島ヲ借用シ度旨申入置キタリ。

十月初旬露國及歐洲諸新聞ニ露國政府ハ巨濟島ヲ占有スルニ決定シタリトノ報道傳ヘラレタルニ依リ在露杉村代理公使ハ露國外務大臣代理ニ就キ問合セタル處、先方ハ右風説ハ無根ナル旨ヲ答ヘ、又在韓林公使モ外部大臣及皇帝ニ尋ネタルモ何等聞込ミタルコトモナシトノコトナリシカ、帝國政府ハ露國ノ出方及艦船ノ舉動ニ注意スル様出先官憲ニ訓令シタリ。

然ルニ翌明治三十三年二月初旬露國艦隊鎮海湾ニ入り土地ノ選擇ヲ爲シ居リシカ、同月十三日韓帝ノ密使ハ林公使ニ對シ、昨十二日露國代理公使「バグロフ」皇帝ニ謁見シ明治二十七年迄親密ナリシ露韓關係カ韓國政府ノ爲ニ漸次冷却シタルコトヲ訴ヘ、木浦及馬山浦ニ於テ土地讓與ヲ希望セル地區ハ日内トナリタルニ付他ノ適當ナル地ヲ與ヘラ度旨ヲ勧説又ハ脅迫シタルニ依リ皇帝ハ外部大臣協議アリ度旨答ヘタルコトヲ傳ヘ、尙林公使ノ意見ヲ求メタルニ付同公使ハ(一)馬山浦ニ關シテハ(第一)地區ヲ十里以内トスヘク、若シ其以外ニ於テ露國ニ許ストキハ他條約國ハ同様ノ請求ヲナスニ至ルヘキコト、(第二)讓渡ノ場合ニハ軍事上ノ目的ニ使用セサルヘキ保障ヲ取り置クコト、(二)木浦高下島ニ關シテハ關係日本人ハ露人カ買入レタリト稱スル部分ヲ引渡スコトシ異議ナキ旨ヲ述ヘタリ。而シテ二月十四日林公使ノ問ニ對シ「バグロフ」代理公使ハ、右土地ハ馬山浦港内ニ限ルモ港内ニ適當ノ地ナキトキハ之ニ近接セル地ヲ選定スヘキ旨ヲ答ヘタリ。

右ニ關シ帝國政府ハ二月十六日林公使ニ對シ、帝國政府ハ露國ヲシテ鎮海湾附近ニ於テ巨濟島ノ諸港ヲ扼スルカ如キ地區ヲ得シムラ好マナルニ因リ馬山浦港内又ハ居留地外十里ノ境界線ニ接近シタル位置ニ於テ選擇セシムル様努力スヘキ旨電訓シタリ。

二月末在露英國大使カ本件ニ付「ムラビヨフ」大臣ニ尋ネタル處、同大臣ハ露國政府ハ該地方ニ於テ土地ヲ占領セントスル意志ナク單ニ馬山浦ニ於テ貯炭所ニ充ツヘキ一地區ヲ購入セント欲スルモノナリト語レル趣ナリシニ依リ青木外務大臣ハ在露公使ニ對シ、露國政府カ馬山浦港内若クハ其直接ノ附近ニ貯炭所用地ヲ選定シ夫ヨリ遠ク出テナルコトハ最モ望マシキコトト思考スルニ付内密ニ其方針ニア「ムラビヨフ」伯ヲ動カスコトニ盡力スヘキ旨訓令セリ。其後鎮海湾ニ在リシ露艦乘組將校、公使館書記官、在馬山浦領事等ハ附近各地ヲ探索シ居リシカ、三月二十三日外部大臣朴耆純ハ林公使ヲ訪問シ、露國公使カ巨濟島ヲ他國ニ讓與セサルヘキコト及馬山浦ヲ距ル三、四十韓里ノ藍浦ニ地區ヲ要求セルコトヲ内報シ、韓國政府ハ日本ヨリ强硬ナル保障及援助ヲ得ルニ非サレハ露國ヲシテ土地ノ選定ヲ馬

三九〇

REEL No. 調-0047

0212

山浦港内若クハ之ニ接スル場所ニ限ラシムルコト能ハサルヘシト述ヘタリ。

於茲同月二十七日山縣總理、青木外務、桂陸軍、山本海軍ノ四大臣ハ林公使ノ意見ヲ參酌シテ左ノ覺書ヲ以テ政府ノ方針ヲ決定セリ。

覺書

三九二

頃日在韓林公使ヨリノ電報ニ依レハ露國ハ馬山浦港内ニ適當ナル土地ヲ發見スルヲ得サルニ依リ馬山浦ヨリ韓國里程凡シ三十里ヲ隔テタル土地ヲ要求シ該要求ハ露國皇帝ノ命ニ依リ又露國代理公使ト旅順口總督ト熟議ノ上提起セラレタルモノナルカ故ニ韓國政府ハ到底之ヲ拒絶スルコト能ハサル

ヘシト思考シ居ル旨同國外部大臣ヨリ林公使ニ内話シタル趣ナリ右ハ軍事上ノ目的ニ供用スルモノト信セラルニ就テハ之ニ對シ均勢ヲ維持センカ爲メ巨濟島内ニ於テ帝國ノ地歩ヲ占メ置ク事甚緊要ノ義ニ付此ノ際林公使ヲシテ韓國政府ニ對シ

一、漁業並ニ海產製造用ノ名義ヲ以テ左ノ場所ヲ借入ルルコト

巨濟島西南部竹林浦ノ南岸ニ當ル小半島但シ栗浦ノ北西端ヨリ起リ東望山、嶺北ヲ經テ陽地洞ノ北西端ニ達スル想像的直線以西ニアル半島全部

二、將來永遠ニ日本國以外ノ別國ニ左ノ場所ヲ讓與又ハ貸與セナル旨韓國政府ノ證言ヲ得ルコト

巨濟島全部及其ノ沿岸ヲ距ル韓國里程十里以内ニ包括セラル諸島嶼

右二個ノ要求ヲ提起セシメ尙之ト同時ニ前記借入地ニ付テハ若シ韓國政府ニ於テ露國ニ土地ヲ貸與スルコトアラハ帝國モ亦其ノ貸與條件ニ均霑シ露國カ其ノ借入地ニ於ケルト同様帝國ノ借入地ヲ使用經營シ得ルヲ保障セシムヘシ

右覺書ノ趣旨ニ依リ青木外務大臣ハ三月二十八日林公使ニ對シ巨濟島借入方ヲ韓國政府ニ提議スルト共ニ我要求ヲ成就セシメンカ爲ニ韓國政府ヲシテ露國ノ要求ニ對シ巨濟島租借ニ關シ既ニ日本政府ト云々ノ約束アル旨ヲ回答セシムル様申入ルヘキ旨訓令シタリ。

然ルニ露國ハ我方ノ態度ニ鑑ミル所アリタルモノノ如ク其模様ヲ變ヘ、同月二十八日露國代理公使ハ

皇帝及外部大臣ニ對シ韓國カ巨濟島ヲ他國ニ讓與セサルヘキ約束ヲ露國ニ與フルニ於テハ藍浦ニ對スル要求ヲ撤回シ、所望地區ヲ馬山浦十里以内ニ選定スヘク又露國ハ巨濟島ニ關シ自制的約束ヲ韓國ニ與フヘキ旨ヲ申入レタリ。

韓國側ハ右露國ノ要求ヲ認ムル意向アリタルヲ以テ同月三十一日林公使ハ外部大臣ニ對シ巨濟島借入ニ關シ申込置タルコトヲ想起セシメ今回要求ヲ再ヒ提出スヘキ本國政府ノ訓令ヲ受ケタル旨ヲ述ヘ、露國人ハ已ニ我要求ト同様ノ漁場三ヶ所ヲ取得セルヲ以テ日本ノ要求ハ條約權ニ基クモノニシテ韓國政府カ巨濟島不割讓ノ約束ヲ與フルハ日本ノ要求ヲ無視スルモノナルヘキコトヲ指摘シ、不割讓約束ヲ請求スルコトヲ得ストノ兩祕密協定ヲ締結セリ。

之ニ對シ帝國政府ハ四月十一日林公使ニ訓令シテ前記三月三十一日ノ訓令（覺書ト同様）ノ第一項ノ要求提起ハ之ヲ中止スヘキモ巨濟島ノ一部ヲ漁業用トシテ借入ノ件ハ從來ノ行懸モアリ且ツ租借ト割

三九三

讓トハ別問題ニ屬スルヲ以テ右韓露間約束ノ爲何等影響ヲ受クヘキモノニ非ラナルニ依リ時機ヲ見テ其旨外部大臣ニ言明シ他日開談ノ餘地ヲ残シ置クヘキ旨ヲ訓令シタリ。

右露國カ選定シタル地區ハ馬山浦居留地南方鎮海灣入口ノ對岸栗九味ニシテ面積約十七萬六千坪内純然タル海岸平地三千坪アリ、其内ニ日本人迫間ノ買收セル土地二十三斗落（一斗落ハ位置及地味ノ如何ニ依リ百坪乃至百三十坪）ヲ包含シタリ。然ルニ露國領事ハ右土地ノ面積ハ檢分ノ際馬山浦監理丁大有カ言ヒタル所ト差違アリテ苦情ヲ述ヘ結局在馬山浦坂田領事及在釜山能勢領事トノ交渉ニ移リ、我方ハ賣買證書及朝鮮官憲ニ對スル地券請求ニ關スル公文書類ヲ示シテ邦人ノ所有權ノ確實ナルコトヲ説明スル所アリタルカ、結局在京城林公使ハ「バグロフ」公使ヲシテ追問ノ權利ヲ認メシメ其所有地區ノ面積ヲ八千五百平方米トシ實測上增加セル千百平方米ハ切詰メ、之カ代地トシテ露國人所有地ヲ受取ルコトニ協定成リ明治三十三年五月二十七日解決シタリ。

二、鎮海灣ニ於ケル露國海軍根據地設置說

栗九味海軍用地借入後露國軍艦ノ同地ニ出入スルコト頻繁ニシテ灣内測量ヲナシ且ツ陸上及海岸ニ各種ノ施設ヲナセルヲ以テ露國ハ同地附近ニ海軍根據地ヲ設置スルナラントノ風說行ハレ、明治三十四年三月帝國議會ニ於テモ議員ノ質問アリ。右質問ニ關シ三月二十八日在京露國公使ハ加藤外務大臣ニ會見ノ際本件ニ關シ本國政府ニ報告シタルニ本國政府ヨリハ露國ハ鎮海灣ヲ租借セントスルノ意志毫モナク全ク無根ノ嫌疑ナルコトハ日本政府ニ保障スルモ可ナリトノ電報アリタル旨ヲ告ケタリ。其後明治三十五年一月韓國ニ於テ露國代理公使カ「ギンスブルグ」男ノ咸鏡北道鐵山利権獲得運動ヲ支持スルト共ニ海軍根據地獲得ノ内密運動ヲ爲シ李址鎔、李根擇等ノ親日派要人ヲ恫喝スル等ノ報告アリ

タルヲ以テ、二月五日小村外務大臣ハ在韓萩原臨時代理公使ニ對シ帝國政府ハ何レノ國タルヲ問ハス韓國沿岸ニ於テ海軍根據地ヲ取得スルコトニハ絕對ニ同意スルコト能ハナルヲ以テ其含ヲ以テ露國ノ運動ニ對シ最モ嚴密ニ注意シ且ツ防禦手段ヲトルヘク、尙帝國政府ノ此意向ハ韓帝及其政府ニ言明セラレテ差支ナキ旨訓令シタリ。依テ同代理公使ハ李址鎔ヲシテ皇帝ニ右訓令ノ趣旨ヲ傳奏セシメタルニ、皇帝ハ露國側ヨリ未タスル要求ヲ爲シタルコトナク又斯ル要求ニ對シテハ絕對ニ許可ヲ與ヘナル決心ナル旨答ヘタル趣ナリ。

尙二月十三日露國外務大臣「ラムストドルフ」ハ栗野公使ト會談ノ際本問題ニ付日本衆議院ニ於テ質問アリタル由ナルモ右ハ事實無根ニシテ日露ノ關係ヲ惡化センカ爲ニ斯ル風說ヲ流布スルモノナルヘシトノ旨ヲ述ヘタリ。

第二項 露國側ノ釜山及馬山浦ニ於ケル土地買收

明治三十二年ヨリ翌年ニカケ露國側ハ其商人會社又ハ外國人ノ手ヲ通シテ韓國南岸ノ要地ヲ商業的手段ヲ以テ買收セシメタルカ其重ナルモノ左ノ如シ。

一、朝鮮ニ於テ鐵山利權ヲ得タル露人「ギンスブルグ」ハ明治三十三年三月長崎ニ於テ露清銀行長崎代理人佛國人「マリックス」ト馬山浦土地買收「シンデケート」ヲ組織シ馬山浦居留地土地競賣ニ參加シタリ。「ギンスブルグ」ハ馬山浦ニ於テ石炭庫、穀物倉庫等ヲ建設スル所アリタリ。

三、東清鐵道會社ハ明治三十二年ニ至リ其船舶ヲ增加シ航運業ノ發展ヲ圖リ釜山馬山浦間ニ定期航路

ヲ目論ム等活動シタルカ、其在釜山「エゼント」換國人「フウベン」ハ馬山浦居留地第一回競賣ニ依リ

三十五區中外國人ノ競落セル「十一區内二十區ヲ取得セリ。其後右ノ内十三區ハ「ギンスブルグ」ニ
移讓セリ。

第三項 日露開戰前ノ韓國ニ於ケル日露關係問題

明治三十六年六月ニ於ケル韓國ノ日露關係問題ノ重ナルモノハ直接交渉問題二件ト間接問題二件ナル
カ、右ハ孰レモ開戰迄未解決ナリシ處其概略次ノ如シ。

一、直接交渉問題

(一) 慶興ニ於ケル露韓電線接續問題

義ニ明治二十九年日露莫斯科議定書第三條ニ於テ露國ハ京城ヨリ露韓國境ニ至ル電線架設ノ權ヲ
保留シ居リタル處、其後明治三十一年露國ハ露韓ノ電信線ヲ慶興ニ於テ接續セントシ又明治三十
四年ニ至リ在韓露國公使ハ韓國政府ニ對シ本件實現ヲ強要セルカ韓國側ニ應セサリシヲ以テ、
同年十一月露國ハ勝手ニ其國境ヨリ慶興ニ至ル電線ヲ架設シタリ。之ニ對シ韓國側ハ明治三十五
二月地方官憲ヲシテ右ノ電柱ヲ撤去セシメタリ。

於茲露國公使ハ在韓公使ノ意見ヲ求メ來リタル結果本件ハ日露間直接交渉問題トナリタル處、
帝國政府ハ前記莫斯科議定書ニ規定ノ次第モアリ又之ヲ絕對防止スルハ事實上困難ニシテ却テ不
利益ナル結果ヲ生スヘキヲ認メタルヲ以テ、日韓海底電信條約ノ規定ヲ利用シ韓國及露國ニ於テ
我提議ニ係ル代價的條件ヲ充スニ於テハ本件ヲ承諾スルニ決シ、即京城ニ於ケル日韓電線ノ器械
の連絡ノ料金ノ均等公平ノ二ヶ條ヲ韓國政府ニ於テ承諾スルヲ條件トシテ露國側ニ提議シ右日露

(二) 馬山浦居留地警察問題

馬山浦各國居留地ニ於ケル警察ハ開港ノ當初ヨリ木浦及其他ノ例ニ倣ヒ各國居留地會ノ決議ニ依リ
當分ノ間日本領事館警察ニ委任セラレ居リシ處、明治三十三年四月露國副領事來任以來之ニ故障
ヲ唱ヘ居留地規則ニ違背スルモノトシ再度京城外交團ニ訴ヘタル結果、外交團ハ形式上專屬警察
ヲ設置シ署長及署員ハ主トシテ日本人ヲ採用スルコトニ内議纏リタリ。

二、間接問題

(一) 鳴綠江森林利權

韓國ニ於ケル森林利權ハ前ニ述ヘタル通り露人「ブリネル」ニ於テ之カ特許ヲ受ケ後ニ「マチュ
ン」等ノ極東林業會社（註）之ヲ繼承セルモ、其鷗綠江森林利權ハ契約ニ依リ明治三十四年九月迄
ニ着業セナレハ失效スルコトトナリ居リシヲ以テ、同年三月在韓露國公使ハ韓國外部大臣朴晉純
ニ對シ前記移轉ノ旨ヲ通告シ且ツ特許期限ヲ一九〇一年一月一日ヨリ二十年間ト改メ尙着業期限
ヲ更ニ三ヶ年延長セシコトヲ要求シ之カ承諾ヲ得タリ。然ルニ露國側ハ合同契約ノ會社組織・露
韓人ノ使用、鬱陵島茂山ノ事業放棄、林區ノ未確定等ニ關スル規定ニ違反シ勝手ニ伐木ヲ爲シ居
リタリ。於茲明治三十六年三月韓國農商工部ハ韓國理材會社ニ對シ鷗綠江岸上下一帶ノ森林伐採
權ヲ特許シタリ。而シテ清國ノ義盛公司ハ同會社トノ契約ニ依リ本事業ヲ協同事業トシ之カ爲
合資會社ヲ設立シタリ。

右阿部ノ契約ハ韓國政府ノ認可ナキヲ以テ林公使ハ本邦人ノ権利擁護ノ爲交渉シタルモ同政府ハ同一ノ山林ヲ兩人ニ許スコト能ハスト拒绝セリ。右本邦人ノ権利貫徹方ニ關シ林公使ヨリ請訓ノ次第アリタルカ帝國政府ハ對露關係、關係邦人ノ企業能力等ニ鑑ミ林公使ニ對シ我方ノ権利ヲ保留シ置ク旨ヲ韓國政府ニ通知スルニ止メ、一方韓國政府ノ露國ニ對スル從來ノ反抗的態度ハ依然強硬ニ繼續セシメ時局ノ發展ヲ待ツヘキ旨訓令シタリ。

(註) 極東森林會社

極東森林會社ハ露國ノ極東政策ニ於テ重要ナル役割ヲ勤メタルモノナルカ、其成立ノ事情ハ極東政策ニ對スル武斷派ノ首脳ニシテ露帝ノ信任有スル「ペゾ・ラゾフ」、其從弟タル海軍大將「アバザ」等ハ明治三十五年滿韓ニ於ケル鐵業及林業力軍ニ經濟上ノミナラス政治上重要ナリトシ之チ大仕掛ニ經營セントシ數同御前會議ニ提議シタル處、帝林嫡アレクサンドル・ミハイロヴィチ「大公」、「アバサ」、「ペゾ・ラゾフ」等ハ此事業ナ政府ノ經營トセントシ皇帝又之ニ賛成シタル様子ナリシニ、總理大臣「ワシーチ」、外務大臣「ラムスドルフ」、陸軍大臣「クロバトキン」等ハ之一反對シ私的事業トナスヘキコトヲ強硬ニ主張シタル結果、極東森林會社ヲ創立スルコトトナレリ。帝室ハ約二十萬圓ヲ支出シ他ノ皇族モ出資セルカ同會社株主ニハ左ノ高官アリ。

侍従將官騎兵大將、伯爵 アレクセイ、イグナチエフ

式部長官皇后附 ヨジトル・ゲツセ

侍従將官前商港航運次官 伯爵 フシリイ、アンドリコフ

同 近衛騎兵聯隊長 伯爵 ヨシトロフ

陸軍少將 公爵 フェリックス、エスボボフ

中央「ツラル」金銀會社社長 伯爵 スマールコフ、エルストン

退職近衛大佐 リヤリヤスキイ

海軍大將 アバザ

東北西伯利協會

前在韓公使 マニニン

同會社首脳ハ「アバザ」及「マニニン」ニシテ、朝鮮鐵山利權ヲ獲タル「ヤンヌブルグ」男モ株主ニシテ明治三十六年中國會社代表者トシテ朝鮮ニ在リタリ。

會社ハ明治三十二年「ブリネル」ヨリ「マニニン」カ讓受ケタル朝鮮森林利權ト「ヤンヌブルグ」男ノ朝鮮鐵山利權ヲ繼承シ、滿洲ニテハ一九〇一年九月「ハロフスク」市居住満國人紀風臺外八名及露人「ルビノフ」カ特許ヲ得一九〇三年三月「ヤドリドフ」ニ賣渡シタル撫順炭坑ヲモ繼承シタリ。

(二) 京義鐵道

京城義州間鐵道敷設權ハ曩ニ佛國「フィブル」會社之ヲ獲得シタルモ期限内ニ起工セナリシ爲明治三十二年無效トナリ、韓國政府ハ韓人ノミニテ組織セル大韓鐵道會社ニ之ヲ許與シタルカ、同年六月在韓佛國公使ノ請求ニ依リ韓國政府ハ佛國ヨリ技師ト材料トノ供給ヲ受クルコトヲ承諾シタリ。而シテ宮内府ニハ右大韓鐵道會社トハ別ニ西北鐵道局ヲ設ケ佛國技師及監督ヲ雇入レ同鐵道ノ土工ニ着手シタリ。

依テ明治三十六年二月露國ハ京義鐵道ノ敷設權ヲ要求シタルモ韓國政府ハ自國ニ於テ敷設スルヲ理由トシテ之ヲ拒絕シタリ。我方ニ於テハ京城釜山間ノ鐵道敷設權ヲ有スル處、同鐵道ハ京義線ト共ニ經營スルニ於テ通商上及軍事上ノ效力ヲ有スルモノニシテ京義線モ我方ニ於テ敷設スル必要アルヲ以テ本件權利獲得方ニ付林公使ニ訓令スル所アリタリ。

(三) 龍岩浦租借問題

明治三十六年二月二十七日在韓露國公使館ハ韓國外部ニ對シ曩ニ一八九六年「ブリネル」カ得タル

森林利權ノ事業ノ爲近ク森林會社員カ現地ニ赴クニ付之ニ對シ便宜供與アリ度旨申入レタリ。其

後四月ニ入り右關係露人來韓シ、又同月下旬露人及支那苦力各約百名鵠綠江口龍岩浦ニ來リ土地ヲ買收シ土工ヲ起シ附近ニ在ル白馬山ノ森林伐採ヲ初メ又義州トノ間ニ電線ヲ架設セリ。

當時滿洲ニ於テハ露軍第二期撤兵期ナリシモ露國ハ撤兵ヲ止メ鳳凰城ヨリ兵ヲ滿韓國境ニ分遣シ居リシヲ以テ我方ニ於テハ其行動ニ注意シ實情調査ヲ爲シ居リタル處、七月二十日露國森林會社代表ハ同地ニ出張セル鵠綠江森林監督趙性協ト會社製材所敷地トシテ二十餘萬方米ノ土地貸借契約ヲ締結シタリ。於茲八月十三日帝國政府ハ在韓公使ニ訓令シテ韓國政府ニ於テ該契約ニ承認ヲ與ヘサル様警告セシメ、更ニ八月二十六日在韓公使ノ請訓ニ對シ、帝國政府ハ滿韓ニ關スル大局問題ニ付露國ト交渉中ナルニ依リ此際本件ヲ引離シテ別ニ交渉ヲ開クコトハ好マシカラス其内時機到来スベキニ付皇帝ニ謁見シテ龍岩浦占領ハ當初ヨリ全然不法ノ行爲ナルカ故ニ事實上之ヲ是認スル租借契約ニハ如何ナル修正ヲ加フルモ同意スル能ハス、右ニ付テハ適當ノ時機ニ於テ露國政府ヘモ交渉スベキニ依リ韓國政府ハ露國ノ要求ヲ拒絕シテ右交渉ノ結果ヲ俟ツベキ旨ヲ上奏セシムル様回訓シタリ。

韓國政府ニ於テハ八月二十八日趙ノ契約承認ヲ拒絶セルカ、同日在韓露國公使「バグロフ」ハ多少ノ修正ヲ加ヘタル新契約案ヲ外部ニ提出シ調印ヲ迫リタルモ之亦九月九日拒絶スル所トナレリ。然ルニ十月ニ入り露國側ハ同所敷地内氣象臺ニ砲臺様ノモノヲ建築セルモ帝國政府ハ大局問題ノ解決迄本問題ニ關係セサル方針ヲ持セリ。

第四項 韓國ノ對露斷交及條約廢棄ニ關スル頗末
日露開戰後明治三十七年三月在韓林公使ヨリ、韓國ト露國トノ間ニ從前成立シタル通商條約其他ノ合同

條約ハ日韓議定書(註)ノ成立及兩當事國ニ於テ各自ニ使臣ヲ撤退セシメタル事情ニ顧ミ今後ニ其效力ヲ有スル筈ナシト雖モ猶多少反對ノ理由ナシト限ラナルヲ以テ此際韓國政府ヲシテ公然ノ方法ヲ以テ露韓兩國間ノ諸種ノ合規條約ハ總テ效力ヲ失ヒタル旨ヲ宣言セシムルコト事宜ニ適スルモノト思考ス、殊ニ鵠綠江森林伐植ノ如キハ我軍ノ行進ニ伴ヒ正式ニ我方ニ於テ經營スル必要生スベキニ付之ニ對抗スベキ露國ノ権利ハ形式上抹消シ置ク必要アリト思考スル旨意申ノ次第アリタルニ依リ、同年五月小村外務大臣ヨリ右條約及約束ノ廢棄ハ後日ニ憂フ貽サナル爲必要ナルニ付適當ノ時期ニ於テ右手段ヲ取ラシムベキ考ナリシ處、今ヤ露國ハ海陸共ニ大敗シ韓國上下ノ態度茲ニ一層我ニ歸依スルニ至リ既ニ在露韓國公使ニモ公然撤退ノ訓令ヲ發シタルヲ以テ此際前記ノ手段ヲ取ラシムハ時宜ヲ得タリト思考スルニ付在韓公使ヨリ韓國政府へ内密ニ交渉シ左記趣旨ノ宣言ヲ公布セシムル様取計方回訓セリ。

林公使ハ右訓令ニ基キ韓國當局ニ面議シタル結果同國政府ニ於テハ我申入通り取計方可決シタルカ、宣言全文ノ發表ハ甚々躊躇セル模様ナリシモ林公使ノ勸告ニ依リ五月十八日附發表スルニ至レリ。

前文

大韓政府ハ日本カ露國ニ對シ戰ヲ宣シタルハ一二大韓ノ獨立ヲ維持シ東洋全局ノ平和ヲ確立スルニ在ルヲ思ヒ曩ニ議定書ヲ訂結シ協力以テ日本ヲシテ交戰ノ目的ヲ達スルニ便ナラシメ今又在露公使館ヲ撤退シタリ故ニ韓露間ノ外交關係ハ實際ニ於テ斷絕シタルモ尙將來我大韓ノ位置ヲ明白ニシ且露國ヲシテ從前ノ如ク條約特許合同等ニ藉口シ侵略的行動ヲ再ヒスルコトナカラシメンカ爲茲ニ外部大臣ハ勸宣書案ヲ議政府會議ニ提出シ經議ノ後議政府參政ト連名上奏シ裁可ヲ經タリ。



勅 宣 書

四〇一

一、從來韓露兩國間ニ締結シタル條約ト協定ハ一體ニ廢止シ全然無効トスルコト
一、露國臣民若クハ會社ニ認許セル特許合同中今ニ至テ尙其期限内ニ在ルモノハ自今以後ハ大韓政
府カ以テ妨ナシトスルモノハ前ノ如ク其認許ヲ繼續享有セシムルモ豆滿江、鴨綠江、鬱陵島森林
伐植ノ特許ニ至テハ元來一個ノ人民ニ許諾セシモノナレトモ實ハ露國政府カ自ラ經營ラナスノミ
ナラス該特許規定ヲ遵守セシシテ擅ニ侵占的行爲ヲ爲セシニ付該特許ハ之ヲ廢止シ全然施行セサ
ルコト

(註) 日韓講定書換率(明治三十七年二月二十三日調印)

第四條 第三國ノ侵奪ニ依リ若クハ内亂ノ爲メ大韓帝國ノ皇室ノ安寧或ハ領土ノ保全ニ危險アリ得合ハ大日本帝國政府ハ速
ニ處置必要措置ヲ取ルヘシ而シテ大韓帝國政府ハ右大日本帝國政府ノ行動ヲ容易ナラシムル爲メ十分便宜ヲ與フル事

第五條 大日本帝國政府ハ前項ノ目的ヲ達スル爲メ軍略上必要ノ地點ヲ處置使用スルコトヲ得ル事

第六條 兩國政府ハ相互ノ承認ヲ經スシテ後來本協約ヲ違反スヘキ協約ヲ第三國トノ間ニ訂立スルコトヲ得サル事

（ル）ナホニナナ日ニナメ

REEL No. 調-0047

0219